



さざんか会の50年

力を合わせて

目次

「50周年記念誌発刊に当たり」	宮代 隆治	3
「さざんか会年譜」		4
「歩んだ道を振り返る」	宮代 隆治	6
「北総育成園48年」	武井 敏朗	23
「さざんか会創立50周年おめでとう（ついでに）」	荒木 直躬	33
「創立50周年に寄せて」	池田 健	35
「さざんか会と共に50年」	赤津 勇	36
「祝 辞」	好村 肇	38
「努力のたまもの」	藤澤 新作	38
「息子とグループホーム」	島田 祥子	40
「Sさんへの伝言」	山本 英昭	41
「私の福祉との関わりの記憶」	滝本 宣博	43
「さざんか会創立50周年に寄せて」	齊藤 幸子	45
「地域で暮らす」	野口 友子	46
「想いを具現化してきた法人」	清水 博和	48

「障害福祉施設に勤務し自分が変わりました」	泉 一成	50
「笹川なずな工房 今昔」	荒井 道貴	52
「さざんか会50周年」	白樫 久子	56
「さざんか会創立50周年記念誌にて」	羽生 真弓	58
「働くことは生きること」	高木 恭一	62
「30年を振り返って」	飯田 好江	63
「さざんか会創立50周年記念に寄せて」	興梠 孝	65
「地域の中で育つこと 地域の中で暮らすこと」	中川 公二	67
「時」	小山 光世	69
「28年間を振り返って」	古川世志恵	71
「さざんか会創立50周年に寄せて」	渡邊 隆宣	73
「育みの歴史の中で」	尾村 勉	75
「ここにいる理由」	藤敷 正英	76
「笑顔のために」	奥山 裕美	78
「のまる」とは」	岩佐 龍哉	81

50周年記念誌発刊に当たり

社会福祉法人さざんか会 理事長 宮代 隆治

1972（昭和47）年に社会福祉法人さざんか会は誕生しました。今年、創立50年目を迎えました。さざんか会の生みの親である「船橋市手をつなぐ育成会」は1954（昭和29）年に設立されたのであり、それから18年を経ての法人格の取得でした。それまで、育成会は自力で建てた無認可の施設「京葉学園」を運営

していましたが、厳しい経済的運営あるいは事業の恒久化の問題等の解決のため、「社会福祉法人さざんか会」として新たな出発を期しました。そして、当時の精神薄弱児通園施設「京葉学園」（定員30名）を新設しました。その2年後、育成会が待望していた入所施設「北総育成園」（定員50名）が香取郡東庄町に、船橋市によ

り建設され運営をさざんか会が担うこととなりました。これらがさざんか会の初期の取り組みとなります。その後、養護学校（現特別支援学校）卒業後の進路の確保、地域生活実現のための方策、障害のある人の高齢化への対応、そして児童発達支援センター事業への着手等必要とされる事業について逐次取り組んできました。全ては、障害のある人たちに自分らしく充実した毎日を送っていただく、それがより豊かな人生に結び付いていくように、と願ってのことです。

私たちは、障害の有無により人としての価値に優劣があつてはならないと思います。全て人は互いの人格や人権を尊重し、支え合いながら存在することが当然であると確信します。さざんか会はそんな本当の「共生社会」を目指し、これからも障害のある方々と一緒に歩いていきます。向かうべき進路は明らかです。たとえ、困難があろうとも皆で力を合わせ進みます。

社会福祉法人さざんか会年譜

昭和 29 年 (1954 年)	11 月 11 日	船橋市手をつなぐ親の会 (船橋市精神薄弱者育成会) 設立
昭和 31 年 (1956 年)	7 月 10 日	「京葉学園」完成
昭和 32 年 (1957 年)	1 月 21 日	千葉県知事より財団法人「京葉学園」認可
昭和 47 年 (1972 年)	3 月 1 日	社会福祉法人「京葉学園」設立認可 (厚生省収児第 149 号) 初代理事長 小名木 博 就任
同	4 月 1 日	知的障害児通園施設「京葉学園」運営開始
昭和 49 年 (1974 年)	3 月 30 日	社会福祉法人「さざんか会」へ名称変更認可
同	4 月 1 日	知的障害者更生施設「北総育成園」を船橋市より受託運営開始
昭和 58 年 (1983 年)	4 月 1 日	知的障害児通園施設「京葉学園」を知的障害者更生施設 (通所) へ移行
昭和 61 年 (1986 年)	4 月 1 日	知的障害者小規模福祉作業所「さざんか作業所」運営開始
平成 元年 (1989 年)	4 月 1 日	知的障害者小規模福祉作業所「海神福祉作業所」運営開始
平成 2 年 (1990 年)	4 月 1 日	「北総育成園」の定員増 (50 名から 75 名へ)
平成 3 年 (1991 年)	6 月 30 日	知的障害者小規模福祉作業所「海神福祉作業所」閉鎖
同	7 月 1 日	知的障害者更生施設 (通所)「ゆたか福祉苑」運営開始
平成 4 年 (1992 年)	4 月 1 日	「ゆたか福祉苑」の定員増 (50 名から 65 名へ)
平成 6 年 (1994 年)	4 月 1 日	知的障害者小規模福祉作業所「グループきたなら」運営開始
平成 7 年 (1995 年)	4 月 1 日	「さざんか作業所」および生活ホーム「さざんか荘」新築 生活ホーム「長尾ホーム」運営開始
平成 8 年 (1996 年)	4 月 1 日	「長尾ホーム」をグループホームへと移行
同	5 月 9 日	二代理事長 高橋 清一郎 就任
平成 9 年 (1997 年)	4 月 1 日	「ゆたか福祉苑」の定員増 (65 名から 75 名へ)
同	5 月 26 日	三代理事長 鹿倉 操 就任
平成 11 年 (1999 年)	10 月 1 日	障害者地域生活支援センター「魔法のランプ」運営開始
平成 12 年 (2000 年)	4 月 1 日	知的障害者更生施設 (入所)「のまる」(40 名) 運営開始
平成 13 年 (2001 年)	10 月 1 日	「さざんか荘」をグループホームへと移行
平成 14 年 (2002 年)	4 月 1 日	知的障害者授産施設 (通所)「笹川なずな工房」(20 名) 運営開始
同	10 月 1 日	「ゆたか福祉苑」重症心身障害児 (者) B 型通園事業運営開始
同	10 月 1 日	知的障害者地域生活援助事業 (グループホーム)「ゆーもあ」運営開始
同	11 月 1 日	知的障害者地域生活援助事業 (グループホーム)「ワズハウス」運営開始
平成 15 年 (2003 年)	4 月 1 日	知的障害者地域生活援助事業 (グループホーム)「にこにこ」運営開始 「魔法のランプ」居宅介護支援事業指定事業所認可
同	5 月 22 日	四代理事長 宮代 隆治 就任
同	11 月 1 日	知的障害者地域生活援助事業 (グループホーム)「ドドンパ」運営開始
平成 16 年 (2004 年)	4 月 1 日	知的障害者地域生活援助事業 (グループホーム)「ぐーてん」運営開始 知的障害者デイサービス事業指定認可 (のまる)
同	10 月 1 日	知的障害者地域生活援助事業 (グループホーム)「マリン」運営開始
同	11 月 1 日	知的障害者地域生活援助事業 (グループホーム)「あかり」運営開始
平成 17 年 (2005 年)	4 月 1 日	知的障害者地域生活援助事業 (グループホーム)「おり家」運営開始
同	4 月 1 日	知的障害者地域生活援助事業 (グループホーム)「カナスギセブン」運営開始
平成 18 年 (2006 年)	4 月 1 日	「北総育成園」船橋市の指定管理事業所に
同	9 月 1 日	知的障害児通園施設「とらのこキッズ」(定員 30 名) 運営開始

平成 19 年 (2007 年)	6 月 1 日	京葉学園移転「けいよう」(定員 40 名)に改名して運営開始
同	7 月 1 日	「長尾ホーム」を一体型ホームへと移行及び「本間ホーム」運営開始
同	10 月 1 日	「ゆたか福祉苑」生活介護事業指定事業所認可
平成 20 年 (2008 年)	4 月 1 日	「さざんか作業所」と「グループきたなら」を統合し、多機能型事業所(生活介護と就労継続支援 B 型)「カメラアハウス」として運営開始
平成 21 年 (2009 年)	4 月 1 日	共同生活住居事業を「DDホームズ」と「のまのまホームズ」2 事業所に再編成
同	4 月 1 日	「けいよう」生活介護指定事業所認可
平成 22 年 (2010 年)	11 月 1 日	共同生活住居事業ケアホーム「ジャントニオ」運営開始
同	12 月 1 日	「のまる」指定相談支援事業所認可
平成 23 年 (2011 年)	2 月 1 日	「のまる」入所支援・生活介護事業へ移行 定員を減(40 名を 35 名へ)
同	4 月 18 日	共同生活住居事業ケアホーム「まあしい」(定員 3 名)運営開始
同	10 月 1 日	「笹川なずな工房」多機能型事業所(就労移行・就労継続 B 型事業)へ移行
平成 24 年 (2012 年)	4 月 1 日	「北総育成園」入所支援・生活介護事業へ移行
同	4 月 1 日	共同生活住居事業一体型ホーム「ミキミキホーム」運営開始
同	4 月 1 日	「とらのこキッズ」児童発達支援センターへ移行
同	4 月 1 日	「ゆたか福祉苑」多機能型生活介護・児童発達支援・放課後等デイサービス事業所へ移行
同	10 月 1 日	ケアホーム「あかり」移転と名称変更「こんね」へ
平成 25 年 (2013 年)	5 月 1 日	「魔法のランプ」指定一般・特定相談支援事業開始
同	5 月 1 日	グループホーム「よかよか」運営開始
平成 26 年 (2014 年)	4 月 1 日	「とらのこキッズ」保育所等訪問支援開始
同	6 月 1 日	「カメラアハウス」定員 18 名を 23 名に(生活介護 5 名増)
同	8 月 1 日	「とらのこキッズ」相談支援事業開始
同	11 月	「北総育成園」本館・旧居住棟大改修工事完了(全室個室化)
平成 27 年 (2015 年)	5 月 1 日	グループホーム「ときわ」(定員 4 名)運営開始
同	7 月 1 日	児童発達支援センター「さざんかキッズ」(定員 80 名)運営開始
同	9 月 1 日	グループホーム「野の花」運営開始
平成 28 年 (2016 年)	10 月 1 日	グループホーム「ゆーもあ」及び「にこにこ・マリン」移転、統合し「にこにこ」へ。
平成 29 年 (2017 年)	4 月 1 日	「笹川なずな工房」定員 20 名を 25 名に(就労継続支援 B 型 5 名増)
同	10 月 1 日	「カメラアハウス」定員 23 名を 28 名に(生活介護 5 名増)
平成 30 年 (2018 年)	5 月 1 日	グループホーム「こんね」移転・定員増(5 名)
同	6 月 1 日	グループホーム「たんご」(定員 7 名)運営開始
同	10 月 1 日	「笹川なずな工房」就労定着支援事業開始
平成 31 年 (2019 年)	3 月 1 日	グループホーム「すずらん」(定員 6 名)運営開始
同	4 月 1 日	「笹川なずな工房」就労移行支援事業廃止、生活介護事業(定員 11 名)の開始
同	4 月 1 日	「ゆたか福祉苑」生活介護事業(多機能型)を廃止、生活介護事業へ
令和 3 年 (2021 年)	10 月 1 日	「魔法のランプ」運営休止

『歩んだ道を振り返る』

宮代 隆治

一、法人設立前夜

①通園施設「京葉学園」の設立

さざんか会の生みの親である、昭和29年に設立された「船橋市手をつなぐ育成会」は、その2年後の昭和31年には船橋市内西船にある曹洞禅宗の名刹、「宝成寺」の境内地に「京葉学園」を自力で建設しました。これは、障害のある吾が子に幸せを、と立ち上がり運動を始めた育成会、その懸命の運動を知り境内



● 宝成寺山門 左が京葉学園

地に施設を作ること提案していただいた同寺の住職、赤星隆禅師（当時、船橋市の福祉事務所長）の功德の賜物でありました。「宝成寺」のご援助がなければ、この施設建設はかなわなかったものであり、このご好意がどれだけ育成会を助け勇気付けられ



● 旧本堂

たか、計り知れませんが、この後、平成19年に「京葉学園」が市内二和西に移転するまでの51年間に亘り、境内地を使用させていただくことになりました。

設立されたこの学園に、当時就学猶予や就学免除の子もたちを中心に、障害の故に義務教育から外された子どもたちが通ってきました。思えば、この国で全国の障害のある子どもたちが障害の軽重に関係なく義務教育を受けることができるまで、まだ長い年月を待たなければなりませんでした。

さて、この施設運営に要する費用は、主に子どもたちの家族が負担しました。全くの無認可の施設に過ぎませんから、運営に公的資金は配慮されません。家族の負担に頼る運営は容易なものではありません。経済的に、大変厳しい運営が続きました。やはり、育成会でこの施設の運営を円滑に行うには無理が多過ぎる。何とか、公で運営する施設をつくってもらえないものか。そこで、船橋市に対して公立の施設設立を働きかけました。その結果、昭和36年に市内藤原町に児童通園施設「藤原学園」が設立されました。親たちは、「やれやれ、これで施設は大丈夫、厳しい運営の苦勞から解放された」と安堵したものの、万

事解決とは行
きませんでし
た。「藤原学
園」入園に関
し、その措置
入園を申請し
た者の内、よ
り障害の重い
子どもたちに



● 昭和 31 年に育成会が宝成寺境内
地に建てた最初の京葉学園舎

ついで入園が許可されなかったのです。曰く、教育の効果に疑
問あり、とのことでした。そこで、再び育成会は「京葉学園」
の運営を続けることとなりました。

② 老朽化と運営の限界

以前と変わらず、子どもたちは毎日嬉々として通ってきます。
経済的な状況は変わりません。その内、「京葉学園」の建物も
徐々に老朽化してきました。ある日、屋根裏に昇った野良猫に
より、天井が落ちてくるという事故が発生してしまいました。
建物に手立てを尽くさなければならぬことは自明の理でした。
同時に、年々利用する子どもたちも増えて、先行きの運営に多
くの課題も覚えてしまいます。それらを打開するに、育成会は
一念発起して新施設の建設と法人格の取得に取り組みることし
ました。

折から、高度経済成長期も終盤を迎え漸く社会的に福祉に陽
の当たりかけ始めた頃ではなかったでしょうか。千葉県の指導
も障害者福祉を担う団体の誕生には積極的であり、法人格取得
や新施設の建設については積極的な指導がなされました。とは
言え、施設建設には多額の自己資金が求められるのであり、育
成会挙げてそのための募金活動に邁進しました。チャリテー
ショーやバザーを開催し、その収益をこのような事業に充てる
ことは、以後も長く継続される育成会の年中行事となりました。

③ 社会福祉法人「京葉学園」の誕生

育成会の積極的な活動、多くの皆様からのご支援、行政の指
導等を受けて、昭和47年3月に法人格を取得するに至りました。
今でこそ育成会が母体となり、社会福祉法人格を取得して障害
福祉事業に取り組む団体は数多くありますが、50年前にこのよ
うな活動を率先した親の会は稀でした。その背景を探ると育成
会が標榜する言葉に出会います。「一人は皆のために、皆は一
人のために」、そして船橋の育成会は「自分たちでやれること
は、自分たちでやろう」と。

なお、法人格取得時の法人名称は「ざざんか会」ではなく
「京葉学園」でした。これは、運営する事業が児童通園施設
「京葉学園」のみであったから。昭和49年4月、船橋市により
「北総育成園」が設立され、その運営委託を受け事業が複数に
なったことを機に、名称を「ざざんか会」と変更しました。

④ 親なきあと、育成会の思い

親が元気な間はわが子の面倒は看れるが、親なきあととは誰がこの子のお世話をしてくれる…。これは、船橋の育成会ばかりではなく全国の障害のある子をもつ親の共通の悩み、課題でした。ご家族にとってこの悩みを解消するに、入所施設の存在がどうしても必要でした。24時間、365日の生活が保障される施設が船橋にも欲しい、育成会の願望であり自分たちにできることは自分たちでやろう。そこで、市内にその土地を求めている活動が始まりました。

結局、市内に土地を求めることはかなわずつてを頼りに香取郡東庄町に建設地を見出すことができました。さて、その建設には莫大な自己資金が要されます。チャリティーショーやバザーの開催、募金活動などでこつこつと資金を集めますが、なかなか目標の金額には届きません。この窮状を知った市は、入所施設の建設を引き受けてくれました。こうして、昭和49年4月には「北総育成園」が開設され、同時にその運営をさざんか会に委託されることとなりました。

二、社会福祉法人としての活動開始

① 精神薄弱児通園施設「京葉学園」の10年

児童福祉法に則って設立された新設「京葉学園」、園長に



● 水遊びに子どもたちも大はしゃぎ

児童園施設がこの役を担っていました。民間施設として幼児の療育を手掛けたことは先駆的実践と言えましょう。30名の定員は、いつもほぼ満たされていました。こうして昭和47年から58年3月までの11年間に約百名の子どもたちが入園し、巣立っていきました。

「宝成寺」前住職 赤星隆禪氏のご子息で当時同寺住職の赤星隆宏氏を迎えてのスタートでした。「京葉学園」は児童施設ですの



● 運動会のセレモニー

で18歳までの利用が可能でした。ただ、市内には先行した公立の通園施設「藤原学園」があり、就学猶予・免除した子どもたちは専らそちら

を利用し、「京葉学園」は幼稚園や保育所の利用のかなわない、知的障害のある幼児が利用することになりました。早期発見、

早期療育は当時から始まっていましたが、当時は主に公立の児

② 養護学校高等部を卒業する子どもたち

この国で養護学校義務制が始まったのは昭和54年です。船橋市立の養護学校が市内金堀町に開校したのもこの時でした。翌55年には高等部も設けられました。時を同じくして、高等部卒業後の進路として、重い障害のある子どもたちが通える通所施設が必要、との声が育成会から聞かれるようになりました。入所施設の整備を中心に展開していたこの国の知的障害者施策でしたので、通所施設の整備は全国的に遅れていたし、家族と一緒に地域で暮らしながら通所の施設を利用するという考えも希薄でした。どこにも進路先が無ければ在宅でいるしかない。これが現状でしたし、親が面倒を看ることが困難になれば入所施設に入るもの、が常識に思っていました。しかし、養護学校は義務化されたのであり、どんなに重い障害があっても教育は保障され、その後卒業を迎えることは自明の理です。その受け皿をどうするのか。

この頃、全国的に行われていたのが無認可作業所の設置でした。法人格を取得して施設を建設するのは、相当の時間も掛かるし建設の費用も必要となります。簡単にできる事業ではありません。無認可作業所ですと市町村の条例なりにその根拠を定め、自治体からの補助金をもって運営が可能となります。既存の建物を使用するの設置も可能です。こうして、全国に無認可作業所が数多く出現していました。

③ 「京葉学園」を児童施設から成人施設へ移行

昭和58年3月には市立船橋養護学校から第1回の高等部卒業生が出るのであり、とても社会に職を求めることの難しい重い障害の子どもたちの進路先は…。「京葉学園」をそんな子どもたちの通える施設に変えてほしい。育成会から強い要望が出されました。法人は、この声に応えるべく昭和57年からこの作業に取り掛かりました。

施設種別の変更となりますが、壁は厚いものがありました。児童福祉法から精神薄弱者福祉法へ、法律を超えての移行であり、県の担当者も手掛けたことが無いということで、一つひとつ厚生省へ問い合わせながらの作業が続きました。例えば、それまでの保育室を作業室へ変更するに、一人当たりの面積であったり、トイレも男女別に箇所数を揃えたり、用途が異なれば必ずと仕様もそのように整えなければなりません。このために、大きな改修工事も施さねばなりませんでした。

施設種別は精神薄弱者通所更生施設になります。当時の県下の状況は、先述のように国の方針も入所施設整備が主流でしたので、成人が利用する通所施設自体がほとんどありません。市川市で、1か所だけ公立の通所更生施設が設置されていて、民間施設は全くありませんでした。風の便りに、東京都には学校教育終了後に重い障害のある人たちの通う施設があると聞き、訪ねました。とにかく、これから設置する成人の通所施設の運営に役立つならば見識を深め、参考にしたいとの思いでし

た。それは、生活実習所という東京都独自の制度による施設でした。江戸川区と足立区にある施設を見学したのですが、確かに重い知的障害や身体との重複障害の人たちが利用されていました。職員配置も手厚く場面によっては利用者対職員が2対1、あるいはもっと手厚く配置されていたように覚えています。しかし、経済的に潤沢な東京都の事業であることを思うと、あまり参考にはなりません。それでも、できる限りの準備をして通所更生施設として認可を取得、運営に不安を覚えつつも定員30名で昭和58年4月の開所を迎えることができました。

④開所早々からの困難

まず、15名の利用者をお迎えしました。養護学校高等部卒業生及び市内中学校特殊学級卒業生、そして長年在宅状態で施設の利用が初めての方もありました。大半の皆さんの障害程度は療育手帳の重度や最重度と判定されておりました。

当時、船橋市立養護学校は他の地域の養護学校とは異なる傾向がありました。多くの養護学校では、高等部卒業後就労等の進路が決まることが多かったようですが、船橋では中学校の特別支援学級卒業時に社会に巣立つ生徒が多くありました。つまり、養護学校高等部を利用する子どもたちは、それがかなわない重い障害のある子どもたちがほとんどで、卒業後も進路先に福祉的な配慮が要されました。



● 県下初の民間通所更生施設として京葉学園は再出発しました。最初に15名の方が入所しました。

これはある程度予期していたものの、実際始まってみると生活全般に亘る支援の度合いは半端なものではありませんでした。てんかん発作を繰り返す人、自傷や他害行為に及ぶ人、四六時中動き回り、

瞬時も目の離せない人もいました。何より困惑したのは、職員の配置です。当時の措置制度では、この種の施設の職員配置は利用者7.5人に一人の職員の配置。つまり、30名の定員ですと4人の職員で対応しなければならぬ決まりでした。それで、更生施設として将来の自立に向けて指導や訓練を施さねばならない、ということでした。率直にこの職員数では無理だ、と思われました。他に進路を見出すことのできない人たちが、ここしかない切羽詰まった思いで門戸を叩いたのであり、それを正面から受け止めるのが施設の責務だ、とっていました。ただ、実際は人件費について千葉県や船橋市からの助成があり、2人増員できていました。それでも、職員は圧倒的に不足でした。この他にも問題はありました。例えば、通所の便としての送迎業務は通所の成人施設にはありません。先述のように実

際「京葉学園」に入園された方々は全員ほぼ重度、最重度という人たちであり、自力で公共の交通機関を利用して通うということは無理でした。家族が自家用車であるいは交通機関を利用して送迎しなければなりません。当然、日々の通所に交通費を用意して通わなければなりません。当時、JRについては知的障害児・者の割引制度はありませんでした。ご家族が付き添うとなると更に大きな負担となります。そこで、何とかマイクロバスを一台用意しました。児童通園施設と違い、運転手という職員の配置基準はありません。パートの運転手さんを雇用し、燃料代は送迎車を利用する人たちから、乗車回数に応じた実費を徴収させていただいたことでした。

⑤ 厚生省への問いと答え

大勢の重い障害の人たちに対して、送迎を含め多岐に亘る支援の中心、それを限られた少数の職員で全うしなければならぬ困難、この状況をどのように考えたらよいのか、解決策はあるのか。度々県の障害福祉課を訪ね、現状をお話ししながらこれらの職員の配置はかなわないものか、訴えました。ある時、県の職員さんから「厚生省に聞いてみましょう」ということになりました。しばらくして、担当者から連絡を受けました。厚生省からの答えは、「更生施設にそんな重い障害の人がいることはないはず。いるとしたら、それは措置の間違いだ、まして通所施設に」と。がっかりしましたが、考えさせられました。当

時の更生施設の「更生」の意味は、指導や訓練を受けることにより将来は社会的な自立に結び付く。つまりは施設を卒業し社会復帰を果たすということ。それが可能と判断される人たちが利用するのが更生施設。その程度の障害のある人たち。元よりそれが難しい人の利用は考えられない、といったところのようでした。この問題は、後年千葉県による通所施設への重度加算制度創設という、職員増に直結する施策が作られるまで続くことになりました。

⑥ 定員満杯と続々築立つ卒業生を福祉作業所で

成人施設となった「京葉学園」の定員枠は、2年後には埋まってしまう。毎年、10名あるいは20名の単位で卒業生はいるのであり、こうなることは分かっていました。このままでは、「京葉学園」には入れない。「在宅者を出すな」、育成会からは悲痛な叫びが聞こえます。限られた時間の中で打つ手を探りました。そして、無認可作業所の開設を企画しました。これですと、船橋市との協議により開設することができます。

その頃、公立の児童通園施設「藤原学園」の園庭に、そこを出た18歳以上の人たちのために、市立の福祉作業所が設けられていました。ここが、昭和60年4月に市により大神保町に設立された通所授産施設「光風みどり園」の開設に伴い、利用者全員はそちらに移行、プレハブの建物が空いていました。そこで、この建物を借用するとともに、運営については市の補助金が交



●初期「さざんか作業所」の一コマ、朝のラジオ体操。後方の建物は公立の「藤原学園」です。

付されることとなりました。名称を「さざんか作業所」として昭和61年4月に開所しました。当時、社会福祉法人が運営する福祉作業所は全国的にも珍しかったようです。こうして、利用を希望する卒業生の全員を受けることができました。

定員は19名としていたのですが、これも2年後にはほぼ満杯となりました。更に、福祉作業所を増やすこととしました。こうしないと、在宅者が出てしまいます。そこで、再び市に相談させていただきました。今度は、市内海神に市の所有するとても大きな一軒家がありました。JRや京成の船橋駅からも近く、通所の利便性は上々でした。「海神福祉作業所」としてオープンしたのは平成元年4月のことでした。この頃は、養護学校高等部卒業生の進路先を確保することに邁進していました。

⑦「ゆたか福祉苑」の設立と卒業生の進路確保

用意した2か所の福祉作業所もすぐに定員が埋まり、「いちごっこ」の態でした。この先、一体いくつ福祉作業所を用意したらよいのか。それと、もう一つ深刻な悩みがありました。



●皆さんが大きな期待を寄せる「ゆたか福祉苑」が建設されました。

福祉作業所は補助金によって運営が賄われるのであり、認可施設に比べても職員配置が厳しいのです。利用を希望する人たちは、本来「京葉学園」でお受けすることが相応しい重い障害のある人たちです。それがかなわず、やむなく福祉作業所を利用していたにいてるもの。もつと職員を増やして、手厚い支援ができるようにしたい。それを実現するには、認可施設をつくるしかない、という結論に至りました。この頃、福祉作業所を利用する人たちは合計で50名程になっていました。

早速、建設のための土地探しを始めましたが上手く見つかることができません。そこに、船橋市から応援の声が届きました。土地は市で用意しましょう、だから見つけてください、と。施設建設には、少なくとも3年は必要です。まず場所を決め、次に施設建設に要する国庫補助等を申請します。それが受理され自己資金を工面したり、実際



● 賃借した「グループきたなら」、北習志野駅から徒歩5分位でした。

の建築に要する期間、そして施設開設申請等に要する時間も必要です。この時、私たちは急いでいました。また、3月には卒業生が出ます。急ぎ、受け入れ態勢をつくらなければなりません。そこで、つてを頼り市内車方町に売却の意思のある地主さんを見出し、ここを市で購入、法人に貸与していただくこととなりました。



● 作業中の皆さんです。

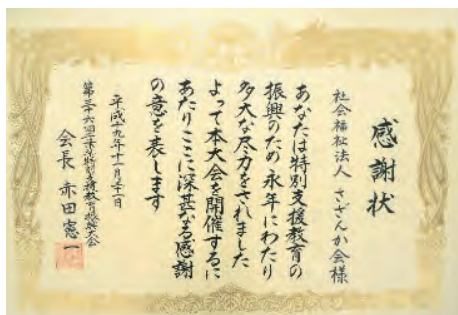
ばかりではなく、「光風みどり園」の方や就労している方等も含めてです。「二人は皆のために、皆は一人のために」を思い出しました。

こうして「ゆたか福祉苑」の設立にこぎ着けました。それは

平成3年7月のことでした。定員は50名、福祉作業所の全員が利用していただく予定でした。

「ゆたか福祉苑」は将来を予測して少し大きめにつくってありました。後々、15名位入れるように。案の定、翌年には15名の定員増をして、希望者全員に入所していただきました。毎春、このように希望者の全員をお受けした途端はやれやれと安堵するのですが、「来春は…」の懸念は払拭することができません。65名の定員も埋まり、もう一人たりとも利用できなくなるのでは。在宅者を出すわけにはいきません。再度、重い障害の方が利用する福祉作業所を開設しました。新京成線北習志野駅近くに「グループきたなら」という名称で民家を借り上げ、スタートしたのは平成6年4月でした。

「京葉学園」を通所更生施設へと移行したり、市から建物を借用し最終的には3か所の福祉作業所を運営したり、「ゆたか福祉苑」を建設したり、全てはどんなに重い障害があっても卒業後の進路先を確保する、この思いがあったからです。青春真っ只中にある子どもたち、彼らの活躍の場が絶対に必要。さまざまな活動を通じて、多くの経験を重ねその後の長い人生に備える。



● 卒業おめでとう！
卒業後の進路を作りました。

そんな大切な時を、在宅という限られた時間と空間に放置するわけにはいきません。こうした活動が評価され、平成19年第36回の千葉県特別支援教育振興大会において、感謝状が当法人に授与されました。

⑧「ハンデで働きたい」という声と再出発

「ゆたか福祉苑」の完成をもって運営の厳しかった福祉作業所は全て廃止するつもりでいたのですが、「さざんか作業所」に在籍のお二人の女性から「ここで、このまま働きたい」という強い要望が出されました。お二人とも、所謂作業を中心に活動のできる、比較的軽い障害の人でした。そこで、やむなく作業所を1か所だけ続けることとしました。ただ、これからは施設の代わりではなくきちんと給与を出せるような福祉作業所を目指すこととしました。

看板はそのままに、目的を変えて再出発したわけですが、市の計画で藤原学園が移転、別の用途の建物が同所に新設されるため、翌平成4年4月には引越することとなりました。そこは、1年間の借用予定で旧二和公民館の2階部分でした。そして1年後、今度は市内丸山の住宅街の一角に民家を借り上げ、また引越となりました。この時、利用者さんの「今度はどこに行くの？」の声が心に刺さりました。落ち着いて、仕事に励める場所をつくらなければ。

⑨生活ホームと福祉作業所の同居

「さざんか作業所」を法人で設立したいという意向を常々育成会にも提案していたのですが、会員の吉橋さんから自身で土地使用のお話をいただきました。JR船橋法典駅から至近であり、バス停も近く通所の利便性は絶好です。願ったりかなったり、早速建設計画に取り掛かりましたが、いきなり暗礁に乗り上げてしまいました。ご提案いただいた土地は用途が住居専用地域であって、原則一般住宅等に供する地域である。よって、福祉作業所等は用途として不向きであり、建設の許可は出せません、と。建築部局より申し渡されてしまいました。

この問題を解決する術はないものか、いろいろ思案されました。人の住むところ…、ならばグループホームのようなものは許可されるのか。平成元年に国により制度化されたグループホームですが、いず



- 1階が福祉作業所、2階は生活ホームになります。`さざんか作業所、と`さざんか荘、として建てられました。

れ私たちも取り組まねばならない課題でした。障害者の福祉作業所がどういうものか、グループホームがどういうものか、建築部局にお話しして何とか建築の許可をいただけないか、繰り返しお願い

しました。そうして、寄宿舎としてならという見解をいただき、一階を作業の場所に充て、二階は居住のスペースということで許可をもらうことができました。ただ、この時国制度のグループホームは入居条件に就労していることであるとか、バツクアップ施設は入所施設でなければならぬとか、高いハードルがありました。そこで、国に先駆けて千葉県が制度化していた生活ホームとしてスタートすることとしました。ホームの利用を希望している人は、国制度では該当から外れる重度の障害のある人たちでしたから。平成7年4月、生活ホーム「さざんか荘」と福祉作業所「さざんか作業所」が同居する建物が完成、各々がスタートしました。

実はこの頃、市内飯山満町に住まわれている育成会会員である長尾さんから、自身でグループホームを建て、世話を勤めながらの運営を計画している。さざんか会にそのバックアップ役をお願いできないか、との相談を受けており、具体的な検討



●法人第1号のグループホーム。新築の「長尾ホーム」。

にも入っております。その後、長尾さんは不治の病に倒られ、障害のある一人息子を残して他界されてしまいました。建築中のホームの完成を見ずに逝

かれたのであり、その無念は如何ばかりでしたでしょうか。私たちは、このご遺志を胸に「長尾ホーム」として同時に運営を開始、結果2か所の生活ホームを抱えた次第でした。その後、グループホーム制度も入居の条件が緩和され、重い障害の人たちも利用しやすくなりました。そこで、順に県制度の生活ホームを国制度のグループホームへと移行させていきました。

三、新たな施策と法人の取り組み

①個室、ユニット仕様」のまる」の設立

「北総育成園」が創立されて四半世紀が経った頃、育成会からこんな声が聞こえてきました、「北総は遠い。親も益々高齢化が進む。市内に入所施設があれば、北総から帰って来られるし、親も会いたいときいつでも会える」と。親の高齢化はお子さんも高齢になっていくということでもあります。

早速、育成会に高齢者問題検討会を設け、障害のある人が高齢になったときの暮らしについて、具体的な施策等についての検討が始まりました。皆さんが一番望んだ策は、主に高齢者が利用する専用の入所施設が欲しい、ということでした。そこで、関東一円で高齢者が多く入所している施設を見学に行きました。そこにあっただのは、指導や訓練を看板に作業活動に汗を流すことより、趣味やリハビリなどを真ん中に、穏やかに静かに

ゆっくり暮らすとでもいうか、とにかくのんびりした人たちの姿でした。同時に、医療ケアの欠かせない寝たきりであるとか、日々命をつなぐことに腐心の人の様子も窺え、厳しい現実を目の当たりにしました。障害者の更生施設は指導や訓練の結果、社会に復帰することを旨としてあるものであり、生涯に亘りその人の安寧な生活を保障するといったものではありません。施設の依って立つ根拠を理解した時、高齢化した障害のある人の安寧な暮らしを保証する、ということとはできるのか。難題であることは理解できましたが、眼前の課題から逃げるわけにはいきません。この時期に開始された高齢者施策、介護保険制度に依る老人ホームに入れてもらえばとの意見も聞かれましたが、それが本当になうものかも不明でした。ただ、従来の入所施設と役割や機能等についてその様相が大きく異ならざるをえない、とは思いました。そして、施設設立のコンセプトをいくつか決めました。

狭義のリハビリの概念は払拭、住む人の居心地を限りなく良くしたい。それには、集団処遇を可能な限り排除する。基本、個室を用意するとともに、集団の単位を少人数化してユニットとするとともに、プライバシーの確保のために配慮する。日中活動の場も、可能な範囲で施設外に設定する。食事も許容される範囲で自分たちで食べたいものを作る等々。つまり、従来の入所施設の弊害と言われる部分を克服し、なるべく「普通の生活」に近付けるようにしました。ノーマライゼーションの理念

を想起しながら。そこで、施設の名称も「のまる」とした次第です。こうして、場所は「ゆたか福祉苑」の向かい側に、10名単位のユニット4つで構成する定員40名の入所施設が完成しました。平成12年4月のことです。

②「のまる」を作りながら考えたこと

「のまる」の工事が始まると、育成会の皆様の期待も益々膨らみます。「これでショートステイも万全ね」とか「〇〇事業もやってもらえるかしら」と。この国では、入所施設に付置する形でいろいろなサービス、それが地域生活を支援するものであれ、営まれていました。これには、常々疑問を抱いていました。「これでは、入所施設が無いと地域生活支援も覚束ないのでは…」。入所施設の負担の上に更に負担をかけるような施策は施設にとつてみれば…。地域に起きた問題は、何でも施設に持ち込むのではなく、地域の中で解決策を作り上げていくことが望ましいのでは。折から、障害者の地域生活支援拡充の兆しが少しずつ見えてきた頃でした。例えば、地域療育等支援事業というものがメニュー化され、そこにコーディネーターという職種が配置され、施設から出かけて各種サービスの調整を行ったり、地域で暮らす障害者の直面する困難等を一緒に解決に向け伴走したりを担いました。また、稀な事例ではありますが、国に先行してヘルパーの派遣事業が実施されている地方もありました。そこでは、養護学校の登下校に自宅から送迎バスの発

着地へヘルパーが同行し、乗降の介助をしたり、そのまま自宅へ送り届けたりサービスが可能でした。このようなサービスを利用しながら、仕事を持つお母さんも仕事を諦めることなく両立が可能である。つまり、子どもの障害の故に仕事を断念することは必要ない。この実践を見聞し、これからの地域福祉はこのように、ニーズの生まれるところにヘルパーなどがデリバリーして、障害当事者はもちろん、家族のあり様そのものも支援することができる、この姿ではと感じさせられました。今までにない、新しい障害者への地域生活支援サービス、こんなサービスのシステムが船橋にもぜひ欲しい。



● 「お届けします、サービスを！」と「魔法のランプ」が始まりました。

そこで、市内松が丘に一軒家を借用し、平成11年10月、「のまる」開設に先駆けて「魔法のランプ」をオープンさせました。地域生活支援センターと称して。買い物に外食、カラオケに習い事等、障害のある人の余暇支援を中心に3人のヘルパーの活動が始まりました。

③ 「魔法のランプ」その後の展開

どんなに強い要望があっても、公的制度ではないサービスの提供ですから財政的には厳しい状態です。法人から、また育成会からも経済的支援を頂戴しながらの運営でした。2年後、国により知的障害者に対するヘルパー制度がメニユー化されました。この時、役所担当の窓口に赴きヘルパーの派遣時間について市職員さんに堂々と申請に及ぶ「魔法のランプ」のユーザーさんの姿がありました。

「うちの子は、○曜日学校からスイミングスクールに直行します。○時まで泳いで、次にファミレスに行き好物で夕食です。それから帰宅します。ついては、この日は○時間の派遣をお願いします」と。こうして、一月に○○時間ヘルパーさんが派遣される量が決まっていきました。A市では最大○○時間出たそう。B市はもっと、○○時間出たそうな、等は当時の私たちの関心の的でした。そこに行かなければ受けられない障害福祉サービスから、必要な時に届けてくれる障害福祉サービスへ。そして、確実に増える支援及び支援者の輪、これらを利用しながら私らしい地域での生活の実現、おぼろげながら見えてきたように思いました。

④ グループホーム開設が続く

平成14年に2か所、15年に2か所、16年に3か所、そして17年は2か所と続けてグループホームを開設しました。これらの

開設は施設毎の取り組みが主でした。通所施設である「ゆたか福祉苑」が母体となったホームが3か所、「京葉学園」から1か所。入所施設である「のまる」が母体のホームは5か所を数えました。入居する方は重度の障害のある人が主であり、生活全般に亘る支援が要されました。それなりに経験を積んだ職員を世話人として配置したのですが、それでも肝を冷やす事故もありました。入浴中にてんかん発作を起こされ、浴槽のお湯を飲み込んでしまい救急搬送されたことも。幸い、生命にかかると事態は避けられ、ホッと胸を撫で下ろしました。この他、自宅から通所施設に通われた方が、自宅でお母さんが急死され母子家庭の故に住まう場所がなくなり、急遽ホームに入っていただけきました。家族との生活も維持されているが、将来に向けグループホームを利用しながら自分なりの自立をめざす人。やむにやまれぬ事情からグループホームを利用する人、入所施設での暮らしから地域生活へと移行する人、それぞれの理由がありました。

使用する建物はほとんどが住居専用の家屋で、不動産屋からの紹介や法人施設利用者のご家族が建てた家屋を借用というものもあります。1ホームは定員3名から7名までと最近はやりの大規模ではありません。以降も、必要に応じてホーム数を増やした結果、現在船橋市内に15ホームで入居者数は65名となっています。他に、東庄町に5名入居の「笹川なずな工房」が立ち上げた「野の花」があります。

⑤「京葉学園」の移転と「うちのキッズ」の誕生

先述のように昭和31年「京葉学園」を建設のため「宝成寺」の境内地を借用し、その後ずっと借用し続けていたものですが、時を経て移転の話が頂戴していました。ご任職は逝去により当時から二代替わりしていたのであり、檀家さんにしても当然代替わり。境内地に施設の在ることの経緯も、分からなくなっているのも当然でした。それは、移転を迫るのではなく「将来、良い場所が見つかれば移転も考えてくださいね」と優しく言っていたいただいたものでした。考えてみれば、数十年ご好意に甘えて居座っていたもの。お寺さんの事情やお申し出も当然、何とか早期に移転に目途を付けたいもの、と思いました。それから情報の入る度に市内各所適地を求めて歩きました。不動産関係者からの情報や育成会会員さんからの情報もありました。購入を前提に交渉の予定でしたので、その金策も準備しなければなりません。なかなか適地を見出せない状況下、いたずらに時間だけが経過していきます。そんな折、市からこんなお話をお聞きしました。当時、知的障害児通園施設は市が運営する施設、定員30名で1か所ありました。ここへの入園希望が毎年とても多く、待機していたり状況が続いている。市として、もう一つ施設をつくり待機状況を改善したい。については、現在市が運営している身体障害者の通所施設「太陽」の増設工事を行うため隣地を購入するのだが、そこに児童の施設も作れたら、と思っている。「京葉学園」もそこに移転させては、というも

のでした。児童通園施設の建設と運営も併せてさざんか会で担うことと、移転に先行して児童通園施設を設置したい。これらが、条件として提案されました。渡りに船、暗闇に光明の思いです。法人設立のきっかけは児童通園施設「京葉学園」の開設でしたし、児童施設として10年余の経験もありました。何より暗礁に乗り上げている移転先の問題もこれで一挙に解決します。快諾させていただき、二和の地に新たな児童通園施設（定員30名）と「京葉学園」を移転、そして新設することを決断しました。平成18年9月に「とらのこキッズ」を開設、翌19年6月に名称も「けいよう」と改め移転がかないました。約半世紀に亘り境内地を提供していただいた「宝成寺」さんには、言葉に尽くせぬ感謝の次第です。

⑥ 事業着手の根拠

「さざんか会」を誕生させたのは船橋市の育成会であり、私どもがその意向に沿って事業を営むことは必然です。今まで入所施設や通所の施設、地域生活の支援等々取り組んだのは育成会に背中を押されての感がありました。今回、市の意向である児童通園施設の開設を通して、市の障害福祉施策により直接的に伝えていくことも今まで以上に念頭に置かねばならない、と認識しました。9年後の「さざんかキッズ」の設立は、この時用意されていたのかもしれない。

⑦ 「さざんか作業所」の再編

平成18年施行の障害者自立支援法は、新たな施設類型として多機能型事業所が創設されました。具体的には、比較的障害の軽い人たちの利用する就労系の事業と、介護を支援の旨とする生活介護事業が同じ屋根の下で展開されます。そこで、福祉作業所である「さざんか作業所」と「グループきたなら」を統合して名称も「カメラリアハウス」と改め再出発することとしました。場所は「さざんか作業所」をそのまま使用しながら、平成20年4月のことでした。

地価のせいが大でしょう、船橋市は社会福祉施設が北部に偏りがちです。逆に東京により近い西部は少ないようです。公共の交通機関が整備され、好立地な「カメラリアハウス」はそういう意味では貴重な存在と言えます。

⑧ プロポーザルに込めて

市内の児童通園施設は「とらのこキッズ」の開園により、公立「さざんか学園」の定員30名と合わせて60名の子どもの療育体制が整ったわけですが、両園とも常々定員は満杯、待機児童が出現していました。この解消策として、市は行田にある国家公務員の体育施設等が整備されている国有地を買い上げ、そこに不足気味の社会福祉施設を建設する計画を立てました。土地確保と整地は市の責任で行い、建設及び運営については社会福祉法人等の民間事業者をプロポーザルにより選別、決定す

るといふものです。そこで、早速挙手することとしました。この他、選任の条件として公立施設は閉鎖するので、この分の定員も加味して定員規模を考慮すること。また、市には肢体不自由児の利用する専門施設が無いので、知的障害と合わせ肢体不自由の子どもも利用する施設であること等が加わりました。既に「とらのこキッズ」である程度療育実績を培ってきたのであり、定員規模の大きな幼児対象の療育施設に、運営実績のある法人が市内には見当たらないこともあり、市の計画にぜひ協力すべきと判断の次第でした。



● とても大きな児童発達支援センター「さざんかキッズ」が誕生しました。

こうして、定員80名（知的障害60名・肢体不自由20名）の恐らく県内では一番大きな児童発達支援センターがオープン運びとなりました。平成27年7月のことです。

⑨ 「魔法のランプ」休止

会計上、積年の課題が顕在化していました。居宅事業を営む「魔法のランプ」の決算で毎年多額の赤字が発生していました。平成11年から運営を開始、22年目を迎えていましたが、この6年程は他の事業からの繰り入れ金で何とか事業を継続させてい

たもの。この額が数千万円の単位となり、このままこの状態を放置すれば他の事業にまで影響が出てしまう。何とか赤字体質から脱却しなければ…。

赤字の要因は明らかです。登録ヘルパーが集まりません。福祉の世界全般に人が集まらなくなっていました。いくら募集を掛けても無しのつづです。たまさか応募があっても、高齢の方が多くなりました。多動な障害児・者のお出かけもままありません。やむなく、キャリアを積んだ職員を配置しますが、現行のサービス対価では十分な人件費にはとても足りません。3名の正職員人件費を捻出するに青息吐息の状態です。

ランプの提供するサービスが地域に暮らす人たちにとってどれだけ大切なものか、認識しています。新しいサービスの登場に、重い障害があっても地域に暮らすことの可能性を信じ、そして実現をと励んできました。時代に先駆け、いち早く着手したとの自負もありました。それがこの結果です。令和3年10月を、とても残念な悔しい思いで迎えることとなりました。ランプを利用していただいた、可愛がってくださった皆様には、心からお詫びしなければなりません。居宅系事業の充実には、地域生活の要です。事業の継続が優先する運営計画をもって、早期に再出発を図らねばなりません。

四、創立50年とこれから

この稿では、さざんか会の船橋圏域での活動を中心に回想してきました。そして、香取郡東庄町では昭和49年4月法人創立2年目の年に入所更生施設「北総育成園」が船橋市により設立され、その運営を当法人が委託されることとなりました。この施設は「船橋市手をつなぐ育成会」悲願の施設です。この実現のために育成会は懸命に土地を探し、施設建設の自己資金確保に邁進しました。チャリティーショーの開催やバザーも手掛け、その時に備えたものです。また、平成14年には「北総育成園」の隣地に通所授産施設「笹川なすな工房」を法人で設立しました。これらを含め、東庄町での事業展開については別稿をお読みください。

冒頭お話しさせていただいたように、さざんか会の生みの親は「船橋市手をつなぐ育成会」です。育成会がなかったら、この法人は存在しませんでした。社会福祉法人として50年経過しましたが、初めの一步を思う時、67年前の育成会の設立に遡ってみることが欠かせません。あまりに理不尽な環境に置かれた障害のあるわが子を抱え、人並みの幸せを願わずにはおられず、親たちが手をつなぎ立ち上がり活動が始まりました。私たちは、この初志を忘れてはなりません。

さて、過ぎた50年を顧みるとき、障害福祉に関する施策もさまざま変遷してきました。法人設立の頃は措置制度の時代でし

た。例えば、施設の入所を希望する時、児童相談所なり役所の窓口なりで申請を行います。後日、〇〇市に住む〇〇さんに〇月〇日から〇〇園を利用しなさい、という言わば命令が届きました。どの施設を利用するかは、行政の裁量であり申請者の意向が反映されることは意図されていませんでした。障害者として障害者は不幸な可哀想な存在であり、哀れみや同情の対象であり、救済し保護することが当然視されていたものです。だから、行政は強制力をもってしても臨まなければならない、と。

昭和56（1981）年『国際障害者年』を国際連合は総会で宣言し、障害者の「完全参加と平等」が謳われました。『ノーマライゼーション』の思想と運動が身近に感じられてきた頃でもありました。平成12（2000）年には、この国の福祉の世界に一大改革がもたらされました。『社会福祉基礎構造改革』と言われ、障害福祉施策の利用について、措置から契約へ、措置制度から契約制度への変更が主たるもので、利用する側と提供する側が対等な関係で、契約を結び利用することとなりました。つまり、利用する側が事業所を選択する素地ができました。そして、障害者の主体性の発揮が図られることでもありました。

平成18（2006）年には「障害者権利条約」が国連総会で採択され、改めて障害者の権利について国境を越えた不変なものとして認識を迫りました。翌年には我が国も条約に署名し、締結に向けた各種法整備も進み、衆参両院の締結承認を受

け、平成26（2014）年に締結されました。そして、平成23（2011）年には「障害者虐待防止法」が、同25（2013）年には「障害者差別解消法」も作られました。

昔、育成会の主催するチャリティショーの看板には「恵まれない子らに愛の手を」と謳ってありました。障害イコール可哀想、不幸。だから助けてあげなければ、ではなかったでしょうか。

障害者も等しく権利を有する市民であり、決して障害の故に不当な扱いを受けてはならない。障害の有無に関係なく、互いの人格を尊重し社会のあらゆる場面で平等に存在する人であることが常識となるのが今日求められているのではないのでしょうか。

さて、現在の法人事業を見ますと、入所支援施設が2か所で生活介護施設は2か所、多機能型施設が2か所で児童発達支援センターも2か所となっています。この他共同生活援助事業（グループホーム）が3事業所で16か所を数えます。これらの障害福祉サービスを利用していただく人は約500名、従事する職員は約300名余となっています。50年前、定員30名の児童通園施設の出発を思うと嘘のようです。その時々、どうしても必要と思われる施設を設立してきましたが、今日このような姿となりました。

法人の経済的な運営を考えたとき、組織としてある程度の規模を構えた方がより安定したものになるうことはありましょ

が、いたずらに大規模化することは問題とっています。組織が大きくなることにより、営む事業の細部に亘り心配りの疎かになることを懸念します。大雑把、粗削りになりはしないか。結果、法人の目指す理念、進むべき道程が霞んだり見えにくくなりはないか。何より、大きな組織を維持、まとめあげることに効率性や合理性が必要以上に幅を効かせることは避けたいものです。

また、経年劣化を考えます。どのような組織も月日を重ねることにより感性が鈍ったり、志が色褪せたり、惰性と怠慢等により組織は腐敗や停滞を自ずと内包するものと思います。この克服は至難の業と心得ます。嚴重に油断なく、法人運営に努めなければなりません。

「さざんか会」の存在理由を考えてみます。私たちは、障害のある人の存在を尊重します。たとえ、障害の故に不便なことがあっても、人としての存在価値は何ら変わりありません。日本国憲法にあるように基本的人権を有し、自由に幸福を追求する権利があります。自由に発言し、公共の福祉に反しない限り自由に行動します。不当に暴力の支配を受けたり、思想や信条を強いられたり拒否します。社会の中で皆さんと公平に、そして公正に交わり自分らしく生きていきます。自由や平等、権利や義務を共有する市民として。そして、障害のある人もない人も、互いの人格を尊重し支え合う、そんな真の共生社会の実現のために「さざんか会」は存在します。創立50年の歩みを噛

みしめながら、また明日に向かって一歩を踏み出します。

これまで、さぞんか会を支えてくださいました全ての皆様に、心から御礼を申し上げますとともに、これからもどうぞよろしくお願い致します。そして、「ありがとうございました」。

『北総育成園48年』

北総育成園 園長 武井 敏朗

敗戦後の傷跡が色濃く残る昭和28年頃のこと。船橋の街中の電信柱に「障害をもった子の親は集まりませんか」の張り紙をする母と子。その張り紙を見て何人かの父母ちちははが集まりました。

1954（昭和29）年「船橋市手をつなぐ育成会」の発足です。その源流の最初の一滴はそんな我が子の行く末を案ずる切ない父母の思いでした。「施設をつくる」ことを目標に、バザーをし、資金を貯め、船橋市に働きかけて、その間20年の歳月。縁あって船橋市から80km離れた香取郡東庄町に用地を確保。建物は船橋市が建て、管理運営は社会福祉法人さぞんか会。「親子後、我が子が幸せに暮らす場所」との願いを乗せて北総育成園は1974（昭和49）年4月1日に開園しました。

眼下に北総大地を一直線に横切る大利根の流れ、その先の



● 育成会待望の入所施設「北総育成園」が完成。

鹿島灘（太平洋）の水平線。その雄大な景色を一望する香取郡東庄町の小高い丘の上に北総育成園は立地します。今年は2022（令和4）年ですから、既に48年、半世紀の歳月が北総育成園の上にも流れていったこととなります。十年一昔と言います。48年ですから5昔、人間にとっては遙かな、たくさんのお話を抱えた歳月です。

昭和49〜50年、お母さんに手を引かれて新しいお友達が二人と北総の坂を上りました。船橋から電車を乗り継いで3時間。笹川の駅から約2km。園坂下にバス停がありそこから約50mの坂道。その坂道には枝葉を張って覆い被さるような椎の木の大きが自生していて園に向かう親子を見守っていました。そして園の玄関にたどり着きました。Sさんのお母さんは当時のことをこう書いています。「振り返



● 10月には、「開所式」が行われました。

れば、私共当時息子と共に、
遙か遠い住み慣れぬ地に着
いた時は涙したものです。息
子をお預けし、これで親の
責任は果たせるのか、また
息子のこれからの集団生活
は大丈夫かなど不安な日々
がありました。そんな日々
を重ねるうち、お互いそれ
ぞれの環境にも少しずつ慣
れ、楽しいこと嬉しいことも増えていきました。』

「元気でね。仲良くするんだよ、また来るからね。」我が子を
置いて母は帰途に着きました。椎の木坂を下る時、母の目には
涙がありました。何時の頃からか、父母はこの坂道を「椎の木
の涙坂」と呼んでいたようです。それから我が子の暮らす北総
に通い続ける父母の歳月は流れていきました。これは他の保護
者も同じことですが、親元から離れて我が子が新天地で生きて
いくということは、保護者が「新たな覚悟を持って、我が子の
生きることを支え守り続けていく歳月」ということが言えます。
50年前のこの人達は20歳前のあどけない幼顔でした。父母も若
くて働き盛り。我が子のために80kmの道は苦になりませんでし
た。園周辺の環境整備や作業の手伝い等、保護者は我が子のた
めに一生懸命でした。そして気が付けば48年の歳月は夢のよう

に過ぎ去っていきました。2022（令和4）年の今年、北総
に暮らす利用者の平均年齢は55歳。北総に籍を置き、その後亡
くなった利用者は30名以上を数えます。

今回、社会福祉法人さざんか会の節目に小冊子を整えること
となり、法人施設の一つとしての北総育成園のことを言葉にす
ることとなりました。冒頭で触れたように、「親亡き後の我が
子が幸せに生きる場所」として48年の歳月は流れましたが、そ
の間に入所施設の考え方も大きく変わりました。福祉制度の改
正、社会情勢の変化、人事の動き等が交差し、昔と違う織物が
できあがっていきました。北総という織物もきれいな花模様の
時もあつたし、とても辛い模様も織り込まれたりしながら今日
に辿り着きました。

特筆すべきは、2020年春3月末、当園は新型コロナウイルス感染
症集団感染という痛恨の出来事を引き受けることとなり大変な
思いをしました。あれから2年が経過。多くの皆様のご助力を
いただき、何とかそこから再生の一日一日を重ねています。こ
の人達の命と向き合うこの仕事を改めて見直す契機となりまし
た。

遠い記憶の彼方のことばかりですが、半世紀経った北総育成
園48年について年表概略を言葉にしてみたいと思います。

1954（昭和29） 船橋市手をつなぐ親の会発足

北総がこの地にできるまで20年、父母や多くの関係者は施設

建設のために献身的なご苦勞をされました。

1974 (昭和49) 北総育成園開園 (定員50名)

初代園長天羽博夫就任・木工作業場完成

1975 (昭和50) 第二代園長小木博就任 (さざんか会理事
長兼務)

1976 (昭和51) 喫茶室「礼舎」完成 (船橋市ロータリーク
ラブ助成)

1981 (昭和56) 農耕・陶芸ハウス増築完成

この年から長崎近藤原理先生との交流が始まる。

1983 (昭和58) 高齢者棟「路の棟」開始

1985 (昭和60) 第三代園長片桐経男就任

1988 (昭和63) 第四代園長高木源三郎就任

船橋市事業・増員増築工事着工

1989 (平成元) 自治活動「北総の里村議会」ラジオ短波で
放送・広島へ平和を考える旅 (似島学園との交流会)・船橋
市事業増員増築工事終了 (定員75名へ)・全国障害者芸能コ
ンクール厚生大臣賞受賞

1990 (平成2) 「路の棟」大規模改修工事終了・紙工芸
班・林産班ハウス完成

1992 (平成4) 農耕班の畑、一町五反に拡大・園芸班大型
フレーム整備・長崎県島原半島深江の現コスモス会と姉妹提
携・第五代園長武井敏朗就任

1993 (平成5) 船橋市事業・職員宿舍新築完成・韓国全羅

北道・全州恩花学校と姉妹提携

1994 (平成6) スウェーデンEKO来日來園、プレイルー
ムで交流会・北総育成園創立20周年記念式保護者会館 (イー
ハトーブ) 竣工

1995 (平成7) 演劇・音楽・踊りクラブ利用者職員31名、
北欧デンマーク・スウェーデン公演の旅

1999 (平成11) 創立25周年記念ハワイ旅行

2002 (平成14) 笹川なずな工房 (通所授産施設) 開所・創
立30周年記念中国旅行 (万里の長城に立つ)

2003 (平成15) 支援費制度開始

2004 (平成16) 創立30周年記念式典 (近藤原理先生記念講
演)

2006 (平成18) 船橋市指定管理施設北総育成園開始

やまだ福祉文庫「自然」(通所生活介護施設) 開始

2011 (平成23) 東日本大震災

2013 (平成25) 船橋市事業・バリアフリー新棟工事完了・
須賀山城本丸再生事業開始 (地域貢献事業)

2014 (平成26) 本館・旧居住棟大改修工事・全室個室化成
る・非常時避難場所 (野の花広場・備蓄庫・炊き出し小屋)
整備・第1回須賀山城開山祭

2015 (平成27) 北総育成園創立40周年記念式典グループ
ホーム「野の花」開始

2016 (平成28) 近藤原理先生お手伝い (椎茸栽培)

2020（令和2） 新型コロナ感染症集団感染（3月28日香取保健所検査・6月4日千葉県終息発表）

2022（令和4） 新型コロナ感染症は引続き世界を席卷

◎50年の中で取り組んできたこと・大切にしていたこと

- (1) この人達の自治活動（北総の里村議会）
 - (2) 「働くこと生きること」
 - (3) この人達の文化活動（演劇クラブ「犬吠太郎」「夕鶴」・踊り音楽下座クラブ）海を渡る
 - (4) 姉妹ある豊かさ（長崎コスモス会・韓国恩花学校）との人的交流
 - (5) 平和教育（30年にわたって長崎・広島・沖縄の慰霊碑に干羽鶴）
 - (6) 近藤原理先生に学ぶ
 - (7) ちちはは兄弟姉妹が支えてくれた
 - (8) 狩野式運動能検査（この人達の生きる力を客観的に捉えた資料）
 - (9) ニ子式老化度測定（この人達の老化度を客観化したデータ）
 - (10) 須賀山城址整備事業
 - (11) 地域と共に生き、共に育つ
- ◎24時間丸ごとの暮らしの中から生みだされた言葉
- (1) 「一期一会一輪の花」



● 清き一票を投じます。

- (2) 「切り拓きつつ共に生きる」
 - (3) 「折り合いをつける」「立つ瀬を残す」「顔をたてる」
- これらの年表・概略を見ただけでは北総の笑顔と汗と涙の日々は見えてきません。いくつかピックアップしてお話ししたいと存じます。

☆この人達の自治活動（北総の里村議会）

・北総育成園を一つの村（北総の里）と考え、村人（利用者）の中から村長と議員を選出し、村のこれからのことを自分たちで考えていく。そんな理想が込められていました。昭和49年5月。第1回北総の里村長村議員選挙が行われました。町役場から投票箱を借りてきての本格的なものでした。初代の村長さんはMさんが選ばれました。以後、毎週土曜日の午後、村人（利用者・職員）が集まって議会開催。

村長の任期は1年。毎年5月に村長・村議員改選の選挙戦があり、立候補者は「ホクソウラ、ヨクシマス」「ミンナト、ナカヨクシマス」等の公約を掲げての選挙戦。このことでは、この人達の人柄



● 当選証書を手に、村長と村議員が決まりました。「がんばるぞ！」

議会自治活動は休止となりました。

エピソード①

・選挙立候補では必ず推薦人がいます。基本的には居室担任が見えます。Yさんの村長選挙立候補公約は「花に水をやります」。担任が付き添って花壇に水をやることをデモンストラーション。選挙運動期間の1週間、彼は毎日そのことをやり続けました。その結果、選挙で当選したかは忘れましたが、彼は花に水をやることを覚えてしまいました。以来、晴れの日も風の日にも花に水をやり続けました。ある雨の日、彼は傘をしながら花に水をやっていました。思わず呆気にとられてしまいました。それから彼は懲りずに花の水かけを続けました。花は根腐れを起こして枯れてしまいました。

からくるいろんなエピソードがありました。施設の暮らしを生き生きとしたものにするためにこの自治活動は大変有効な役割を果してくれました。約45年継続された自治活動は利用者の高齢化等で、2019（令和元）年の村長村議員の任期満了を以てこの北総の里村

エピソード②

・Hさんは、「ぼくは園坂の掃除をします」と立候補公約。彼は竹ぼうきで一生涯懸命に格好をつけて掃き掃除をしました。その結果彼が村長になれたかどうかは記憶にありませんが、彼は掃き掃除をするということを感じました。朝7時過ぎ、その姿が坂道にありました。そして、無心で黙々と坂道の落ち葉を掃きました。雨の日にはほっかむりをして。台風の日にはさすがに「今日はやめなさい」と言っても「いいだよ、やるだよ。」と続けていました。そんな姿を見て、私は何だか手を合わせて彼のことを拝んでしまいました。

☆働くこと生きること

北総の立地する香取郡東庄町は純然たる農村地帯。園の屋上からは一面に広がる田園地帯が望めます。開園当初、この地帯を以て生きていくかと考えた時、「百姓やるしかあんめーや」と直ぐに結論ができました。男性は①農耕班、女性は②手芸班からスタート。その後利用者が増えるに合わせ、利用者の特性を考慮して③園芸班④木工班⑤陶芸班、新しい作業班が生まれてきました。

この人達はそれまでは在宅で大切に育てられていて、畑仕事や裁縫仕事等にとりかかるといっては、体力を養い、技術をつける時間が必要でした。少しずつ少しずつ、北総の人になっていく時間の中でそれらを身につけていきました。職員も素人集団



● 鍬やスコップを持ち、額に汗しての耕作作業の風景。

で、この人達の力を引き出し作業の形を整えるのにはたくさんの時間が必要でした。

時は流れ、平成元年船橋市事業として建物の増築・利用者の定員増（50名から75名へ）が為されました。それに合わせて⑥林産

班⑦紙工芸班を新設。船橋

市立船橋養護学校卒業生を中心に若い皆さんが多く北総に暮らすようになりました。暮らしの中心である作業活動は活発になり、それからの10〜20年が作業班活動の上り調子の時期で、作業班売り上げは粗利益で1500万円以上の目標が設定され、そんな数字を何年か続けて実現できる時代がありました。「働くことと生きること」。この言葉はそんな北総の活気ある作業の中で汗する利用者・職員の様子から自ずと生みだされた言葉です。この人達はたくさんのはたきませんが、一つのことを辛抱強くやり続けてくれます。農耕班は、土を「耕す」・園芸班は鉢を「運ぶ」・手芸班は布を「縫う」・木工班は杉板を「磨く」・紙工芸班では楮を「叩く」・林産班は椎茸の原木を「運ぶ」等がこの人達の仕事になります。その仕事に付加価値を付けるのは職員の仕事。7つの作業班はそれぞれ製品の質が高く

なり、売り上げを伸ばし、千葉県のはーとふるメッセ・オブ・ザイヤーでは農耕班の切り干し大根・陶芸班の箸置き三番瀬のハゼ・紙工芸班の和紙干支人形等が何年か続けて優秀賞受賞という高い評価を頂きました。そんな中で半世紀「働くことと生きること」の歳月を重ねてきました。

このことでは保護者の皆様のお力添えについて触れなければなりません。親元から離れて「働くことと生きること」に身を置いて頑張っている我が子を応援する。親の仕事はそのできあがった製品を市民の皆さんに売ること。船橋は都会ですから、農耕班の野菜・林産班の椎茸・園芸班の花を中心によく売れました。北習志野歩行者天国・船橋駅東武コンコース・地元東庄町ふれあい祭り等、いろいろな販売場面で売り子になってくれた父母兄弟姉妹でした。その父母の姿に利用者も職員もどれ程励まされたことか。



● 今年も、シイタケの原木が届きました。美味しいシイタケを育てます。

2020年3月末、当園は新型コロナウイルス感染症禍の中に身を置きました。その後当園のコロナ感染は終息しましたが、心身の完全復活には長い時間が必要となりました。もう昔のような作業活動はできなくなりました。もう一つの要因は利

用者の高齢化。利用者の平均年齢は約55歳。すっかり歳をとりましたが、この人達は仲間と一緒に作業に活動に身を置く時間が一番心が安定しています。令和4年の作業班は、生産性は二の次にして、今ある自分の生きていくための基礎体力を落とさない、そんなことを意識した「働くこと生きること」の一日一日を重ねています。

エピソード③

・その年は雨の多い年で、4月5月6月毎日毎日雨が降りました。そんなことで畑が泥^{ぬかる}淨んでしまい農耕班は畑に行くことができません。Hさんは農耕班に所属。職員のようにはいきませんが、農耕の仕事が好きなので段々と農耕の仕事を覚えていきました。この雨で大根の種まきができません。ある雨の日、彼は私に直訴してきました。「えんちよう、あめで、たね、まけねーだよ」。涙を流してそう訴えてきました。私は、その言葉聞いてこの仕事をやってきてよかったと思いました。

☆近藤原理先生に学ぶ

近藤原理先生は長崎県佐世保の隣町、佐々町で自宅を開放し「なずな園」という障害者との共同生活を実践される傍ら、その暮らしから見えてくる「この人達を大切にするための方法」、技術、言葉を発信し続けました。その原理先生は毎年長崎に原爆が落とされた8月9日を間に挟んで、「なずな障害者福祉合

宿研修」を主催されてきました。この仕事の抛り所が欲しくて、1981（昭和56）年その研修に参加させてもらいました。「おおらかに、細やかに、さりげなく」のんき、こんき、げんき」等の分かりやすくして深い考えをたくさん教えていただきました。以後毎年、この研修に北総職員を何名か派遣し続けました。その足で長崎平和公園に立ち寄り、千羽鶴を納めました。夜、余暇の時間に利用者や職員は鶴を折りました。その鶴は長崎の平和公園の他、広島平和公園、沖縄の平和の礎^{いしむね}、東北の震災被災地にも届ける機会を持ちました。これが北総の平和教育。北総育成園30周年記念式典には、近藤原理先生にはるばる長崎から来ていただき、記念講演をお願いしました。2016年1月1日、先生からお電話があり「北総では椎茸をやっているそうだが、なずなの裏山に櫟（くぬぎ）の木が自生している。その木で椎茸をやりたいのだが、手伝ってくれないか」とのこと。他ならない近藤先生のためであり、2月に現地を下見をして原木切り出し。3月に植菌。先生は2018年に亡くなられました。先生のお通夜の日、その椎茸がたくさんとれていることが話題になりました。

☆演劇「犬吠太郎」海を渡る

入所施設は24時間この人達が暮らします。昼は「働くこと生きること」ですが、その他の時間をどう過ごすか。その時間に文化活動を手に入れる。当園が立地するこの辺り（香取郡）で



● 演劇クラブによる演題「犬吠太郎」を熱演です。



● 下座と踊りのメンバー、披露の場は世界の各地に！

は古く（江戸時代）からの神楽が文化として生きていて、毎年4月笹川諏訪神社で夜を徹してその神楽が催されました。園でも早速それを見物に行きました。地域の下座連の皆さんが指導に来てくれました。真似事で神楽と大漁節の踊りを覚ええました。何時しか北総の庭で盆踊りをするようになり、地域の下座連、婦人会の皆さんが利用者と一緒に踊ってくれるようになりました。このことでは荒井さんという職員が横笛の名手でお囃子をリードしてくれ北総下座クラブ定着に大きく寄与。

演劇クラブは明治神宮会

館での全国障害者芸能コンクールに出場することを目標に持つようになりました。発語はつきりしませんが、泣いたり笑ったり怒ったりの雰囲気を出せる利用者が何人かいて、ご

当地銚子の「太郎」さんのことをシナリオにした演劇「犬吠太郎」に取り組みました（厚生大臣賞受賞）。そして、この演劇は海を越えて韓国・中国・ハワイ・デンマーク・スウェーデン公演（1995年）に辿り着きました。もう30年近くも昔の話になってしまいました。このことは、この人達が「文化を手に入れる」ことでこんなに豊かな夢が実現することを証明しました。それを演出したのは当園の白樫さん。この人達の可能性を切り拓いた本物の支援をそこに見ました。

☆姉妹のある幸せ

当園は長崎県島原半島深江の社会福祉法人コスモス会（当時は普賢学園）と姉妹の関係を結んでいます。島原半島は雲仙天草国立公園を抱え、天草四郎島原の乱のご当地。その年は普賢岳の噴火した年で姉妹提携調印式は養蚕作業場からその普賢岳の噴火の様子を見ながら進行了ました。1992年8月26日のことです。以来30年の歳月が流れました。相互訪問は継続され、お互いに「やあやあ、また会えたね」の本当の兄弟姉妹の温もりを感じるこの機会となりました。当園のコロナ集団感染に際しては格別のご支援を頂きました。

韓国全羅北道全州恩花学校とも姉妹関係にあります。

1993（平成5）年6月18日姉妹提携調印式。その際のパスポートは旅券事務所が出張して、当園プレイルームで手続きが済みました。北総の利用者がパスポートを所持。国際人になれ

た日。皆で飛行機に乗り海を渡りました。2泊3日の海外旅行でした。園のプレイルームにその旅行の写真が貼られています。ソウル景福宮での記念写真や全州恩花学校での記念写真。それらは、一人ひとりが北総の一員として生きてきた証、心の勲章をそこに見ることが出来ます。今、日本と韓国はあまりうまくいっていません。姉妹になった当時は良好な関係の時代でした。当時のことを思い出すと、よくやったもんだなと感心してしまいます。

☆全ての居室が個室化されたこと

1974（昭和49）年開園当時（定員50名）の居室は8畳の4人部屋。夜布団を敷くと畳は見えません。トイレに行くときは横に寝ている人の頭を踏んづけて行くようなありさまでした。当時から入所施設の最大の問題は「雑居生活」と言われていました。「このことは何とかしなければ」と、当園にとつてその後の大きな課題でした。途中、いろいろと手を入れましたが抜本的な解決にはなりませんでした。

2011（平成23）年は東日本大震災の発生した年です。既にあの年から11年が過ぎようとしています。建物被害はありませんでしたが当園は断水・停電等が2週間以上続き一苦勞しました。その年、船橋市事業としてバリアフリー（居室は全て個室化）新居室棟建築が決定。早速10月からその工事が始まりました。この事業は新居室棟工事終了後、本館管理棟・居住棟の

大改修工事と一体で、最終的に2014（平成26）年に一段落するという足掛け3年の長丁場の事業。仕切られているとはいえ、工事現場と同じ敷地で利用者の暮らしが同時併行しました。そんなことで完成までの期間、心配は尽きませんでした。この期間を何とか無事に切り抜けることができました。

この工事のため、園庭にあった木工班・手芸班・陶芸班の作業所、北総のシンボルの園庭の枝垂れ桜、壁画のある坂道のコンクリート塀等、40年の汗と涙の建物は全て撤去されました。そして、2015（平成27）年4月、完全個室化された建物での暮らしが始まりました。この個室化は利用者の心にゆとりをもたらし、仲間との関係が以前より穏やかになりました。同年4月16日、この個室棟のお披露目を兼ねた北総創立40周年記念式典を開催。船橋市長はじめ多くの皆様がご参集くださいました。このことでは2020年3月、当園は新型コロナウイルス感染症集団感染という現実を引き受けることとなり、多くの関係者のお力添えを頂きましたが、この新居室棟が完全個室であったことがこの集団感染終息への大きな力になってくれたことは間違いありません。

☆地域と共に育つ

過ぎ去った48年の北総の歲月。その歲月は、当園が立地するこの東庄香取地域の皆様にお世話になり、育てていただいた歳月に他なりません。「遠くの親戚より近くの他人」という言葉



● 皆の力で須賀山城址を整備、第1回の開山祭りにこぎつけました。

がありますが、本当にその通りだと思います。

地域の養護学校卒業生を北総で日中預かりをするようになったのは平成に入った頃からでしょうか。当時、地域に通所できる施設はありませんでした。その人数が10人を数える

頃、東庄の町長さんから「北総で、通所施設をやってくれないか」とお話がありました。これが地域の通所施設「笹川なずな工房」「やまだ福祉文庫・自然」へと繋がっていきました。このことは、北総が地域福祉の一つの拠り所として、その実践が地域から認められたことであり本当に嬉しい出来事でした。

林産班が椎茸の貯木場としてお借りしている山の隣山は遠い昔の城跡（須賀山城）。その城跡は篠竹のジャングルと化して人が近寄れない状態でした。社会福祉法人ができる地域貢献事業としてこの須賀山城址の再生を思いつきました。地主さんの了解を頂き、週の日課に須賀山城址整備の日を入れて、少しずつ篠竹の藪を切り拓きました。が、篠竹はなかなか手強くて思うようには進みませんでした。ここで力になってくれたのは、主には林産班を中心とした利用者でした。切った篠竹を一生懸

命運んでくれました。そのうち、見通しが立ち、須賀山城址は再生されました。

2014（平成26）年5月24日、第1回須賀山城址開山祭り。町長さんをはじめ地域の皆さんと北総利用者、職員は一緒になって本丸までの50mの坂道を歩いて登りました。本丸広場の真ん中に東氏の家紋の幟旗を立て皆で遠い昔を偲びました。その際、この須賀山城址整備の主役は利用者であることを地域の皆さんに伝えました。よい地域貢献ができました。

☆終わりに「老いを切り拓きつつ共に生きる・近藤原理」

そんな北総の歳月の中で利用者は歳を取りました。職員は途中で新陳代謝をしますので比較的若いままですが、もう48年前を知る職員は居なくなりました。開園当時から利用者は10名程が健在です。



● 大きな大根が採れました。「美味しいよ」。

平均年齢55歳の北総のこの人達の行く先。まだ余力を感じる人もいますが、多くの皆さんは老いを隠すことはできない状態です。あんなに作業を頑張れた人が、今はその半分の動きしかできなくなっ



●北総 40 周年を皆でお祝いしました。

側面を色濃く持つことになります。そのためには、職員は更に

ています。食事・排泄・入浴・服薬等、一人ひとり

りが気遣いをしなければならぬ状態になってい

ます。成年後見等、当人

を見守る保護者の動静

も気になるところです。

「一人ひとりの利用者の

老いに寄り添う」。これ

からの北総の仕事はその

この人達を大切に知る知識と技術と心を、改めて身につけてい
かなくてはなりません。

振り返って48年。この歳月をご助力くださった船橋市の皆様、
遠くの親戚より近くの他人でご助力くださった地元東庄町の皆
様、関係医療機関。多くのボランティアの皆様。その他大勢の
皆様、本当に有難うございました。そして何より保護者の皆様、
48年のそれぞれのその時代を支えてくれた当園職員の皆様。心
よりお礼申し上げます。本当に有難うございました。しかし、
この道はこれからも長く続く坂道です。決して楽な道行きでは
ありません。皆様、どうかこれからこそお力をお貸しくくださ
いますように心からお願ひ申し上げます。

『さざんか会創立50周年 おめでとうございます』

社会福祉法人九十九会 理事長 荒木 直躬

1956年（昭和31年）66年前のことでした。

小名木博さんという重い障害をもった人の親御さんの提唱
で、知的障害児通園施設が開園されたのは、西船橋駅近くの宝
成寺の境内でした。当時、通園施設は法律にもなく、学校教育

からもはじかれてしまっただけでなく、遊び場のない知的障害の子どもの
唯一の教育の場であり、遊び場であり、その子どもたちの親たち
の心の憩いの場でありました。「京葉学園」と名付けられました。
た。当時のただ一人の職員だった新井利雄氏は「いろいろな年
齢の障害児もいればそうでない子どもも放課後になると遊びに来
る、大変だったけれど楽しいところだった。20歳の頃、月給は
7000円だったな」と当時を述懐しています。

その後船橋市手をつなぐ育成会の方々の尽力の結果、京葉学
園は社会福祉法人さざんか会の経営となり、国庫補助も受け、
名実共に日本で最初の通園施設としてその名を知られるようにな
りました。

赤星さんという宝成寺の住職さんが初代の園長さんでした。ある時、京葉学園を訪れると、それまでは居なかった男性が事務室で机に向かっていました。その方の横顔は、事務を執っているというよりも、何かに挑んでいるようで少し怖い印象を受けました。すると赤星園長さんが「あの人はね、今度入った事務員さんで宮代さんと言っただよ」と教えてくださいました。その時の宮代さんの顔は今でも忘れられません。しかし、宮代理事長はそのことをご存じありません。

あるとき赤星さんは宮代さんに、「自分は住職に専念したいから、君はしっかりと京葉学園の仕事をしてくださいね」と言ったそうです。宮代さんはその時何か重要なことを言われたと感じ、鈴木さんという千葉市内で自宅開放の施設を営んでいる方に相談したそうです。

「宮代さんが来てね、赤星さんからこうこう言われたけれどどうしようって。だから、今に赤星さんは君に園長を代わってくれと言っと思うよって言った。すると彼は少し考えてそれでもいいやと言っていたよ」。その通りになったのです。

私はそれを聞いたとき、宮代という人は何か人生で大事にしていたものを振り捨てたのではないかと思っただけでした。

北総育成園が開設されたというニュースは、県内の福祉関係者の心を温めてくれました。その頃数少なかった成人後の障害者施設が増えたことに保護者達はどんなに慰められたことでしょうか。私が耳にしたのもその頃働いていた施設の子どもの親

からでした。ある日電話でやや興奮した声でそのことを知らされました。

さざんか作業所ができた頃でした。ある人の結婚披露宴の席で小名木理事長にお会いしました。「そろそろ宮代さんに後のことはお願いしようと思うのよ」とおっしゃっていました。思った通りに、さざんか会は大きく発展してゆき、今日大勢の障害をもつ人たちとその家族の方々に安寧と希望をもたらしています。

この度、50周年を迎えられたことは、さざんか会の職員・手をつなぐ育成会の方々をはじめ、実に大勢の人の協力と結束があつてのことだと思えます。

今後とも、宮代理事長を中心にますます発展充実されることを心から祈ってやみません。



『創立50周年に寄せて』

船橋市手をつなぐ育成会会長

池田 健

社会福祉法人さざんか会の創立50周年を衷心よりお祝い申し上げます。

一口に「50年」と言っても、遡ると濃密な年月の積み重ねの結晶であることが、分かります。「法人さざんか会」の淵源は、昭和29年の船橋市「手をつなぐ親の会」（会長 小名木正夫）の発足でした。知的障害児を持つ数名の親達の思いが集結し、子どもたちの通える施設の設定運動をはじめとしたいろいろの活動が大きな流れを作りました。この流れから言っても「法人さざんか会」と「船橋市手をつなぐ育成会」は、元々は一体でしたが「法人さざんか会」は、障害児の将来を想定して施設、事業などを必要に応じて積極的に設立、展開していきましました。その間、国や地方行政にも障害者施策に大きな変化がありました。平成15年の「措置から契約へ」から始まる制度、条約等の新設、変更また、国際的な障害者支援への盛り上がり等、社会環境の変化が顕著になっていきました。「法人さざんか会」は、これら一連の変化に対しても的確に対応してこられました。現時点における「法人さざんか会」は、宮代理事長の指揮のも

と地元の船橋市と東庄町・笹川地区に約12カ所の施設、事業所、グループホームを運営し、500名以上の利用者に対して、300名を超す職員の方々が日々支援しておられます。また、宮代理事長の活動は、船橋市はもちろんのこと、千葉県、全国へと広がり、その活躍、人脈、ネットワークは特筆すべきものであります。

私事で恐縮ですが、私の娘は北総育成園に20数年お世話になっております。北総では例年、新年会・保職懇談会が行われ、会の終了後に武井園長と職員さんとの懇親会があります。ざつぐばらんな雑談の中から、職員達の利用者さんへの真摯な支援の気持ち、また、その質の高さを痛感することがあるありました。これは、理事長、園長の日頃からの指導、教育、訓練の賜物ではないかと思えます。このことは、法人全体に共通し共有されたものだと思っております。

さて、法人の長い歴史の中でもエポックメイキングな出来事が起きたのが、2020年3月に発生した北総育成園の新型コロナウイルス感染症による集団クラスターでした。日本でも、最初のクラスターで、マスコミも大々的に報じたのは記憶に新しい所です。武井園長、白樫副園長を中心として、千葉県、船橋市、法人本体からの援助隊の必死の努力で何とか窮地を脱することができました。たくさんの方々から物心両面からの温かい援助がありました。一部の人々から心無い誹謗、中傷もあり大変な騒ぎでした。しかし、この場面でも「法人力」は、見

事に発揮されたと思います。

最後に法人への今後の期待を述べたいと思います。「障害の有無によって分け隔てられることなく、誰もが、個人としての尊厳が重んじられ共生できる社会の実現」。これは、船橋市が新しく策定した第4次障害者施策の基本理念です。この理念の実現に向けて「法人さざんか会」としても努力していただきました。

『わんか会と共に50年』

社会福祉法人さざんか会 監事

赤津 勇

「わんか会」が創立50年になることを知り、この50年間を振り返ってみた。人にはそれぞれ50年間の歴史がある。私の息子を通してどんな歴史が刻まれたのだろうか。

50年前、息子はまだ2歳だ。生後1歳まえに難治性てんかん「点頭てんかん」と診断された。当時、診断した医師は、歩行は困難かもしれないと診ていた。実際には、4歳で歩けるようになった。30代後半だった医師、50年の歳を重ねた今も息子の主治医です。当時てんかんに対する正しい理解を多くの人に知ってもらうために、てんかんの専門医を中心にして全国的に研修会が開かれていた。本の中にはてんかんに対し誤った見

いと思います。しかし現実として、多くの課題・利用者さんの高齢化への対策・次期後継者の確保・不足する職員の補充・サービス支援の質の向上等を優先的に解決する必要があります。まずは、足元をしっかりと固めていただき、30年、50年先の充実を目指して頑張ってください。理事長をはじめ、関係者各位のご健勝とご繁栄を祈念しあいさついたします。

方をしているものもあった。まだ、てんかん協会ができていなかったが、息子の主治医も設立に奔走されていた。

息子が4歳の時に、千葉県から神奈川県に移ったばかりの弘済学園に入園した。発足したばかりの母子入園で3か月の入園であった。その時に体育の先生がトランポリンの上で息子の両足を持ち、頭を下に振っていた。びっくりしたのを覚えている。先生に聞いてみると脳に良いとのことだった。当時まだ若かりし頃、何の反論もできなかった。このことで歩けるようになったのかとも考えた。ユニークな特訓の3カ月だった。

弘済学園の訓練が終わり、その後、「さざんか会」の支援を受けていくことになった。就学前まで宝成寺さんの境内にあった「京葉学園」に通った。じっとしてられないので、壁を背にして真ん中に息子を、両端に可愛い女兒が挟む格好で座る練習をしたり、楽しそうに過ごしていた。今でも当時お世話になった大勢の先生方のことは息子ともどもよく覚えている。

就学時に船橋市には養護学校（現在の特別支援学校）がな

かった。就学猶予も考えたが、どうしても社会とのつながりを絶つことはできなかった。市川市にはすでに養護学校があった。船橋市に養護学校ができるまで越境入学を決めた。当時担任だった先生は、後に支援学校の校長先生に。その後も長く付き合いがある。

船橋市に支援学校ができると転校。通学時間が短くなり、大変助かった。高等部卒業後の進路も心配だった。障害児から障害者へと大人の仲間入り。当時、障害者の施設は多くなかった。

しかし、息子は「さざんか会」が設立した「ゆたか福祉苑」に通うことができた。また、親が面倒を見きれなくなった時のことを考えてグループホームに入所した。今ますますグループホームの必要性が増してきた。私は当初、グループホームでの生活は社会参加できることが前提で、障害が中程度の人が対象ではないかと考えていた。しかし、「さざんか会」が運営しているグループホームでは、重度の利用者が多数いる。私の考えが誤っていたことに気付かされた。

障害の程度にかかわらず、選挙権が認められた。障害の程度はいろいろな手続きを簡素化するためだと言った人がいた。

息子は、現在グループホーム、ゆたか福祉苑の支援を受けている。今後、本人の高齢化（病気も含めて）、親なきあとはどうなるのか。確実な答えは見つからない。

ただし、答えは「さざんか会」にあるのではないかと、願望も込めて思う。息子の50年、われわれ親の50年。「さざんか会」

抜きでは考えられないほど頼り切って生きてきたのだから。

これからの50年間、どのような事業が展開されていくか。かなうなら50年後を見てみたい。

振り返るにも遠い昔になったが、定年退職まで東京都の公務員だった。勤続数十年のほとんどを児童相談所で児童福祉司として、児童の障害や虐待の問題に関わることができた。入職した部局とは、全く畑違いの福祉分野に転職したのは、息子が重い知的障害児と医師から告げられたことがきっかけでした。

家庭や学校、また社会でも児童虐待問題がクローズアップされているが、数十年前からも同様の難しさがたくさんあった。今や虐待が増えているからではなく、顕在化したのだ。社会の関心事になることは、理解を得る道筋なのだと思う。

知的障害など障害児者の問題も、親の会（育成会）の活動や国連の障害者権利条約、千葉県などの条例ができるなど世界の動きも活発になっている。

差別をなくし、人の身になって考える小さな動きが、やがて、大きな輪となり、世界に穏やかな平和が訪れるのではないか。今、国際問題になっているウクライナ情勢も「相手の身になり、思いやる」ことで、紛争にならず平和に解決されると思うが、甘いのか。

「祝 辞」

前船橋市手をつなぐ育成会会長

好村 肇

社会福祉法人さざんか会は、創立50周年を迎えました。まことにおめでとう申し上げます。

私自身、会社を定年後育成会の活動に参加させていただき、

「努力のたまもの」

社会福祉法人さざんか会後援会会長

藤澤 新作

創立50周年、誠におめでとう申し上げます。永い年月、いろいろな苦勞を重ねて今日を迎えることができましたことは、祝意を述べますと共に感謝に耐えません。

私の後援会の立場としては、年数も浅いため諸先輩のエピソードをまじえて述べたいと思います。

当初は、外部から支援することが目的で立ち上げたようですが、会員の集まりははかばかしくなく、半ば強制的にさざんか

感動と感謝の日々を過ごしましたことは、生涯最高の思い出となっております。

現在81歳となり体力、気力の衰えを感じ、物忘れも多くなりました。コロナ禍のせいにしてゴロゴロ過ごす状態ですが、育成会での充実した楽しい日々のを忘れることはありません。今後、さざんか会が益々充実発展することを祈念しますとともに、障害のある子ども達が充実した生活が送れますことを願っています。

会の入所者を中心に活動が始まりました。

さざんか会は、経済的に大変だったことから、会費も高く、寄附も現在の数倍を超えることもありました。施設を新設するときも、その都度入居者から寄附を募ったりして、皆で努力して作ってきた時代でした。それ故に、むしろ心の結びつきが強くなり、意思の疎通を図ることができ今日に至っております。最近の評議員会では、宮代理事長を中心に情報の交換が行われ、知的障害に関する近況や問題点が分かりやすく理解され、貴重な機会となっております。

また途中から、泉先生の発案により、子育ての経験の浅い保護者を対象にしたテーマで、専門家の先生をお招きして講演会を開催し、多くの人に感謝されたことは、嬉しい活動の一つでした。

私個人としては、私の長男がさざんか会のゆたか福祉苑にお世話になっておりますので感謝はひとしおであります。当初は、子どもに携わっていたのは専ら妻であり、ほとんど任せきりでした（世の男性は概ね同じような状況だったのではないのでしょうか）。

障害者を持ったことによるいろいろな対応の仕方などは経験もなく、途方に暮れたものでした。その中に光明を見出したのが、育成会でありさざんか会との出会いでした。さざんか会に入会してから早40有余年、当時のことを考えると月日の重さを、今更ながらに感じざるをえません。

さらに、この節目に当たり私たち保護者はこれまでを振り返り、じっくり反省しながらこれからの有り様を考えなければなりません。まずは、感染症により情報交換の場が少なくなったことは大変重要です。現状の問題も大切ですが、コロナ禍後のコミュニケーションの在り方をあらためて考え直して対応を立てる必要があります。

また、保護者は現状に少々甘えているところがあるのではないのでしょうか。例えば、高齢化等の諸事情があるとはいえ、保護者会への出席が減少していることが気になります。もっともこのことは、施設でしっかり運営されているからともいえますが、保護者会の運営方法も見直しの一つとなるでしょう。

また、大変好評だった魔法のランプの運営が休止していることは残念ではありません。本人の数少ない楽しみがなくなり、痛

ましい限りです。早い時期での再会を切望いたします。

私達の置かれている状況の改善を声高に言うことは、自分の主旨と異なると思われる人がいると思いますが、現在の障害福祉に関する制度はまだまだ不十分です。独りの力は残念ながら弱いですが。しかし、幸い私達には育成会・さざんか会という強い紐帯ちゆうたいがあります。私達保護者の役割は、さざんか会と力を合わせて、主役である子ども達をいつも真ん中に置いて、本人の幸福とは何か、それにはどうすれば良いかを考えて行動すべきであることには、何ら変わりはありません。個人的な悩みや困った状況を少しでも解消するためには、育成会・さざんか会のもとにもっと情報を密にし、これまで以上にまとまりを強くすることが必要になります。何よりもこれまで培ってこられた「努力のたまもの」を更に発展させることが私達の役割だから。



『息子とグループホーム』

元船橋市手をつなぐ育成会会長 島田 祥子

「さざんか会」50周年おめでとございます。もうそんなに長い月日が経ったんですね。私の息子が「さざんか会」にお世話になり始めたのは、彼が（当時の）市立養護学校高等部を卒業した春（昭和58年）でした。スタートは西船にあった京葉学園です。当時は、今と違って進路先が少なかったため、在宅に戻されずに通園生活が続けられたのは幸いでした。平成の初めに「ゆたか福祉苑」が設立され、私たちは大喜びで移動しました。それ以来ずっと令和2年彼が55歳で亡くなるまで、延々とお世話になりました。息子は障がい区分「6」でも足りないくらい重度でした。手帳は知的と身体2冊持ち、自分でできることは支えられながら歩くことぐらいでした。文字通り全介助です。その上よく発熱し、理由なくシャックリが出ると何日も止まらないという状態が続きました。おまけに一人っ子だったので当然の結果として過保護になります。夫は私以上に甘かったのですがその相乗作用で我が家は全てが息子中心で回っていました。彼の唯一の長所は人が好きで誰とでもすぐ仲良くなれることです。ゆたか福祉苑でも苑生の皆さんや、面倒をみてく

ださる職員の方々と楽しい毎日を送っていました。

そこに、一つの出来事が発生しました。さざんか会がグループホームを開設したのです。当時はグループホームといえば、日常生活は自立し就労までしている方が利用するものと思われていました。私は遠い話として聞き全く視野に入っていませんでした。ところが、夫が入院するという事態が勃発しました。私は何とか切り抜けようと努力しましたが、かなり厳しい状態になりました。その時、苑の職員さんから「グループホームに入れてみたら」というお誘いをいただきました。私としては晴天の霹靂「とても不可能です」と強くお断りしました。しかし、職員さんの方はごく自然に「気楽に試してみたら」と再度勧めてくださいました。私はこの上なく不安でしたが、夫の病状から見て「ほんの少しの間だけお任せしてみようか」という気になりました。息子のグループホームでの生活が、こうして始まったのです。

その結果は？ 全て私の杞憂でした。彼は週末に帰宅した時、疲れた様子もなく明るい顔でニコニコしていました。むしろ何か自信を得たように誇らしげな表情です。私には信じられない状況です。

それ以来10数年、楽しい毎日は続きました。こんなに重い子がグループホームに入っているというのは福祉関係の方々の耳目を集めたようで、我が家にも記者の方が取材に見えました。

私は今でも、さざんか会だからこそ可能だったのだと思って

います。どんなに障がいが重くても等しく自立の機会をあげようという強い覚悟と方針が、さざんか会にあったからだと思っています。最初の帰宅日あんなにニコニコしていたのは、きつと初めての経験がうれしくて仕方なかったでしょう。彼なりの達成感があったのでしよう。「ぼくみんなと同じようにできたよ」とアピールしたかったのかもしれない。私は日頃息子を守ることに、足りない部分を補うこと、ばかりに気を配っていました。親の濃密な庇護に子どもは辟易していたかも・・・と今さら気付いています。

令和2年の夏息子には55歳で亡くなりました。その喪失感はず以上に重く強いものでした。でも、唯一の救いは、彼は

『Sさんへの伝言』

山本 英昭

法人創立50周年、おめでとございませう。

さざんか会を退職して故郷に戻り10年になります。思えば遠く離れた時間も経ったものだと思います。物忘れも始まり記憶も薄れる中、それでも鮮明に思い出されるのは初めに入職した京葉学園のこと、児童通園施設でした。

きつと満足して旅立っていったであろうと考えられることです。持っている機能をフル活動させて、楽しい日々を過ごせたのですから。ゆたか福祉苑での生活、グループホームでの生活、数々の経験を持つことができたのですから。

息子は散歩が好きで、よく車椅子に乗せて自宅の周辺を歩きました。今、私は同じ道を一人で歩きます。どの道にも思い出があふれています。そして私はいつも心の中で呟きます。

祐、よく頑張ったね。祐の人生最高だったよ・・・と。

50周年 おめでとございませう。

そして、ありがとございませう。

Sさん！ 呼び止めて申し訳ない…。

京成西船駅から徒歩5分、宝成寺様の石畳を登り切った左手山門にひさしを付けるようにして学園がありました。山門の横が一階の入口、横が遊戯室奥に各指導室が続き、二階が事務室でした。園バスが到着するや否や、皆は園内を走り回っていました。園舎の横、小高い所が芝生の園庭、電車の好きな子は眼下の電車をよく見ていました。雨でも砂場に直行の子、柵やフェンスによじ上る子、壁にクレヨンでなぐり書き、水が好きで蛇口は開放、食事が終わるとすぐ遊戯室へ…。30人がそれぞれ、風のように、園内を流れていました。自由なスペースの中、発散してもらったつもりですが、時の利用者からは『ダメ

の言葉が多い!』と言われてしまいそう…。『家でトイレ使用時は家中の鍵を閉めてから…』—本当にそうなんだろうな、と思います。

『入口の鉄の扉が…(重苦しい)』の当方の言葉に保護者は—『私達にはここは希望の場所! 輝いていました』扉が鉄であること、いかに希望をもたらししてくれる場所であるかが大事…。土曜学級では、まだ学園に入れない子が待っていました。

法人認可のこの学園ができるまで17年も掛かっている。映画会、チャリティー、バザー、募金活動等、気の遠くなるような保護者の道程。—ある職員『大変だったんですね』(人の思いを受け止められる人もいる)

Sさん、ぜひいつか訪ねてみてください! 今は何もなく話題にもならないけれど、輝いていた希望の法人発祥の地を。

ゆたか福祉苑、けいようと新築の工事を眼前にし、やはり期待でドキドキしたものです。

でもSさん、法人にとって大事なものは何だと思えます? そう当然『利用者』です。でもその利用者に対応するのが職員、事業所がたくさんあっても、中核は『職員』なのです。意欲的な職員が求められます。Sさん、あなたはもう法人の柱なのです。そんなことはない! じゃないです。利用者の日常と歩みは、あなたの手に掛かっているんですよ! 利用者が今何を欲しているか、今何が必要か、気配りを常にお願ひしますね。Sさん、関わった人のことは気にしてくださいね。自分のことを

思ってくれる人が一人いることは、人生どんなに心強いことか。それは逆に自分自身も同じこと…。

Sさん、利用者に適切な対応をするには、まず職員が精神的に穏やかなことが大事じゃないですか。特に新職員は現場での不安・疑問・上司の言動等、葛藤している場合があるかと思うのです。話を聞いてくれる人がいるだけで、どんなに助かるか。Sさん、ぜひ『話を聞く人』になってください。『大丈夫?』、『大丈夫だよ、自信をもって!』—そんな会話が欲しいよね。

Sさん、職員を誉めてますか? もちろん利用者も。保護者曰く『誉められれば、誰でもうれしい!』—至言です。私は職員としては当然のこととして、あまり誉めなかった方…。やはりいけません、誉めることを多くしないと! 誉められると幸せな気分になり、次の行動へのステップに…。『認めた・認められた!』—そんな感じかなあ。まずは職員が幸せな、穏やかな状態にないと…。

いつぞやの法人の研修会は、若い職員の熱気で溢れていました。—『若い柱がたくさん!』そう思いました。Sさん、そういえばあなたと話をしたことがないよね。分かっていることを並べた感じでごめん。—あなたは法人の柱です。そして『宝』です。ありがとうね。

さざんか会の更なるご発展をお祈り申し上げます。

昭和48年にさざんか会に入職。「京葉学園」、「ゆたか福祉苑」、「けいよう」に勤務され平成24年に退職されました。

『私の福祉との関わりの記憶』

滝本 宣博

私と福祉施設との出会いは、大学入学のため上京し、初登校の当日でした。迷うことなく音楽サークルに入部しましたが、サークル内にボランティア活動班があり、「君、暇だったら見学に来ないか?」とお誘いを受け行ったのが、目黒にある老人ホームでした。

それを切っ掛けに、卒業するまでの丸々4年間、月曜日の知的障害者施設と木曜日の老人ホームに歌のボランティアとして通い詰め、自ずと進路は福祉施設へ。都下、国立くわたくしにある児童養護施設が、最初の勤務地でした。

そして、昭和50年がさざんか会との出会いでした。当時のさざんか会は京葉学園と北総育成園の2施設で私は西船にあった児童通園施設京葉学園へ。地元での知名度は低く、やっと行き

付くことができました。宝成寺というお寺の敷地内に、こぢんまりと建っていました。定員30名、スタッフは12名(現場は6名)で6クラスに分かれ、居室は十畳くらいの広さで担当1名、本当にこぢんまりでした。午前は集団保育で全員ホールに集まり、音楽とリズム中心の活動でした。昼食は各居室で済ませ、昼休みはほとんどの園生は広々とした園庭に出て伸び伸びと遊び回っていました。また、特に印象に残っているのがクリスマス会、夏祭り、運動会等の行事でスタッフ、それぞれがアイデアを出し合い、親御さんも加わり、大いに盛り上がったことでした。児童通園施設時代は園生さんもスタッフも、自由で伸び伸びとしていて、時間がユツタリと流れていたように記憶しています。

ところが、昭和54年養護学校(現特別支援学校)の義務化に伴い、学校教育の形は徐々に整備されると思いましたが、卒業後の社会生活の場があまりにも希薄過ぎるという思いから(諸事情があったと思いますが)京葉学園は、通所更生施設に舵を取ることにしました。正直、利用する方の日中を如何に支えていくのか、不安でいっぱいでした。児童通園施設として最後

の年は、中学校を卒業されたばかり2名の女性のみの利用でした。この時のプログラムは多彩で、木工、農耕、陶芸、手芸に加え「読み書き」や「音楽」といった学校の延長みたいなプログラムも用意し、ノンビリといろんな体験をしていただくといった形式を取りました。スタッフも利用者さんと共に学びました。また、近隣との繋がりの大切さを考え、地域清掃という名目で、全員でリヤカーを引き週2回近隣を回りました。そんな日々を送りながらも、スタッフはそれぞれが県内外の成人施設へ見学と実習を兼ね、また数々の研修に参加し、大勢の方々の協力を得て通所更生施設がスタートしました。先の2名の女性もそのまま利用されました。

現在は、私が福祉との関わり始めた頃に比べると、法も徐々に整備され、社会的に弱い立場の人々の権利も少しずつ守られるようになったと思えますが、まだまだ私たちが気付いていない差別や偏見は存在します。また、本人しか分からない悩みで、生きづらさを感じている人は数多くいらっしゃると思います。その方々に気づき、手を差し伸べるこそ福祉の原点だと考えます。

法という強制力のある大きな力が必要ですが、法が定まっても人の心はすぐに変えられるものでもありません。人それぞれ考え方は違います。一人が一人に気づくことが私の望みです。

末筆ではありますが、若輩だったにもかかわらずしかも、親御さんの日々のご苦労も理解できないまま、上から目線で指導

しているかのごとき言葉遣いを発し続けていたことを、心よりお詫び致します。また、知り合うことができた全ての方々に感謝の気持ちでいっぱいです。

昭和50年にさざんか会に入職、「京葉学園」、「けいよう」、「カメリアハウス」に勤務され平成23年に退職されました。



『さざんか会』

創立50周年に寄せて』

齊藤 幸子

「さざんか会」 創立50周年本当におめでとうございます。50年前と言えば時代は昭和、私は小学校の高学年でした。年齢が分かってしまいますが、それだけの長い期間、利用者の皆さんやそのご家族に寄り添った支援を継続されてきたこと、その活動内容から「船橋と言えはさざんか会」と言われるほどの事業展開をされてきたと、心より敬意を表します。

私は、今を遡ること30数年前、産休代替え職員として児童通園施設「藤原学園」のお子さん達と園庭を駆け回っていました。その一角にあった「さざんか作業所」との交流イベント（市長を招いての餅つき大会等々）が、法人「さざんか会」とのご縁の始まりでした。

「藤原学園」での産休代替えが終わる頃、主人の職場の上司とのつながりで、宮代理事長から（当時は京葉学園施設長）「京葉学園」での産休代替え職員のお誘いをいただきました。

宝成寺でのお墓掃除や周辺住宅街を散歩しながらの空き缶拾い等利用者の皆さん達との時間はとても楽しく本当に有意義で

した。

日々の支援にやりがいを感じていた私ですが、浦島太郎同様アツという間に楽しい時間は過ぎ、代替え期間は否応なく終わってしまい「京葉学園」を離れることとなりました。「もう二度とさざんか会にお世話になることはないだろう」ととても残念な思いでした。「京葉学園」を離れ、高齢者福祉に身を置いていた私ですが、平成18年、すっかりご無沙汰していた宮代理事長から「今度児童施設を開設するので一緒にやってもらえないか」とお声を掛けていただきました。

児童は「藤原学園」の時に経験しているとはいえ短期間であり、それにもまして最大の障壁は「責任者としてお願いしたい」というものでした。主人には「大丈夫？ 無理じゃない」と止められました。そんな私の脳裏を横切ったのは「藤原学園」や「京葉学園」での楽しい思い出でした。またあの時に感じたようなやりがいを味わいたいと強く思い、宮代理事長の「覚悟を決めて」の推しの一言で飛び込みました。

当時、船橋市には公立の「さざんか学園」がありました。が、療育を必要とするお子さんの増加に伴う待機児童解消を目指して、二つ目の児童通園施設として「とらのこキッズ」がスタートしました。ご家族と手と手を取り合って一緒にお子さんの成長を喜び合えることに、療育施設の役割を実感することができました。

そして「とらのこ小学校があったらいいのに・・・」と卒園さ

れていくご家族からいただいた言葉を励みにして平成27年には「さざんか学園」の閉園に伴い児童発達支援センター「さざんかキッズ」を立ち上げました。

東京オリンピックの招致決定と同時期になりその影響を受けて思いもよらぬ事態に苦慮しましたが、新たに出逢うお子さん達の遊具や食器・床材や壁紙に至るまで吟味した時間はとても充実し、更地から徐々に形になっていく光景を目の当たりにしながら更なる「覚悟」を決めました。

「さざんか会」の源である「船橋市手をつなぐ育成会」も68年目を迎える今年、車の両輪のごとく歩まれた「さざんか会」の功績は先人の親御さん達の計り知れない「思い」がたくさん詰まった会です。その「思い」を大切にして微力ながら日々奮闘させていただきました。

『地域で暮らす』

船橋市障害者成年後見支援センター長

野口 友子

この度、さざんか会が創立50周年を迎えられたことに、心からお慶び申し上げます。

私は、昭和62年、「京葉学園」に入職し、「ゆたか福祉苑」が

そしてその「思い」を同じくする素晴らしい仲間と共に多くの方々のご指導とご協力で二つの児童施設の基礎をつくり上げることができました。本当にありがとございました。

時は流れ、現在は成人も児童も事業所が増え「選ばれる」時代になりました。歳月をかけて築き上げた児童から成人へと繋がる支援を構築されたこの50年の節目を新たなスタートとして、これからも「船橋になくてもならないさざんか会」として躍進されることを心より祈念致します。

昭和63年京葉学園（産休代替職員）に勤務。平成18年さざんか会に再入職、「とらのこキッズ」、「さざんかキッズ」に勤務し令和3年退職。

設立され、異動になり、15年間勤務しました。常にご本人の立場に立ち、考えること、支援することを学びました。「京葉学園」では、毎朝、園庭で輪になり、あいさつ、一言を話すのですが、新人だった私は、人前で話すことが苦手で、毎朝緊張して臨んでいたことを思い出します。それを和らげてくれたのは、利用者の皆様でした。運動会、夏祭り、親子旅行等々、季節の行事があり、先輩のスタッフから、「皆が喜ぶためには、もっと驚くようなこと、もっと、分かりやすく」と無理難題？を投げられ、四苦八苦しました。それは、「もっと想像力を働か

せるように」ということだったと、今は理解しています。「京葉学園」、「ゆたか福祉苑」で過ごしたことは、大変なこともありましたが、それを忘れるほど、楽しかったことが思い出されず。

私の原点は、「京葉学園」でのA子さんとの出会いです。私の顔を見ると、そっぽ向いてしまう。動きを止めてしまう。どうしたら良いのか悩みました。今日はダメでも明日こそはと嫌がられても関わることを続けました。ある日突然、A子さんから笑顔を向けられたことは、とてもうれしく、今も鮮明に私の中にあります。A子さんには、人と関わる楽しさを教えていただきました。言葉でなくても「コミュニケーションは取れること」「あなたのことを知りたい」「気持ちは通じるもの」と、今もそれが私の軸になっています。

当時の苑長（宮代理事長）に、活動の中で、この人とこんなことをしてみたいと相談すると、「やってみるといいよ」とG Oサインを出してくれ、花の栽培や絵画教室など、皆様と楽しく有意義な活動ができました。また、通園できない方にはこちらから出向くこともありました。その人に合った支援、必要な支援が行えました。

現在のよ様に制度がない中、「できない」と諦めてしまうのではなく、「どうしたらできるか」と考え、支援できたこと、そのような中で仕事ができたと、大変誇らしく思っています。退職してからも「ゆたか福祉苑」へ行く機会があります。皆々

んが変わらず、迎えてくれることが、とてもうれしいです。

現在私は、PACガーディアンズで権利擁護支援を行っています。さまざまな病気や障がいがある方、ご両親が亡くなり一人暮らしをしている方、グループホーム、施設で暮らししている方と接しています。各々さまざまな生活課題を抱えています。困りごとを聴くと、制度の中では解決できないこともあります。誰か、何をどう支援するのか、できるだけ多くの支援者で考えます。私がさざんか会で勤務していた頃より、制度は充実してきましたが、外出支援など、まだ不足していると思います。判断能力が不十分になった時、本人と共に考え、本人に寄り添い、本人に伴走支援する人が必要です。病気になっても、年を取っても、一人になっても、本人の意思が尊重され、住み慣れた地域で自分が望む生活を送れる。そんな地域社会を創っていくは、さざんか会は欠かせない存在であると思います。今後も一層のご指導を賜われますようお願い申し上げます。

終わりに、これから更なる飛躍と皆様のご繁栄を祈念してお祝いの言葉とさせていただきます。

昭和62年さざんか会に入職、「京葉学園」及び「ゆたか福祉苑」に勤務、平成14年退職されました。

『想いを具現化してきた法人』

特定非営利活動法人 船橋福祉相談協議会

基幹相談支援センターふらっと船橋 清水 博和

社会福祉法人さざんか会の創立50周年という大きな節目を迎えるにあたり、関係者の皆様に対し、これまでのご苦労とその活動に深く敬意を表するとともに心よりお祝い申し上げます。

当方が社会福祉法人さざんか会（以降「法人」と呼ぶ）にお世話になり、36年が経ちます。そのうちの15年は現在の基幹相談支援センターでの勤務であり、法人との直接業務から一線をおいた位置にあります。総合相談を立ち上げるにあたり、障害を取り巻く法体系の改正により種別を問わない「三障害への対応」へと変わりました。ある特定の障害支援のイメージが付かないことが相談支援には「重要」と宮代理事長の考えの下、今に至ります。

当方が法人に入職した頃は、母体である「船橋市手をつなぐ育成会（以降、育成会と呼ぶ）」との関係も強く、初代小名木理事長の影響は、この仕事をする上で大きなものでした。当時は育成会の行事も季節ごとに催され、当方もその関わりが当たり前のように参加してきました。そのことにより多くの育成会会員の皆様やご本人とも知り合い、普段の利用者との関わり

とは違う方々との関わりは、1人でしかない貴重な時間でした。会員の皆様には勤務していた作業所のお手伝いにも多くの方が来られ、いろいろなお話を聞かせていただきました。当方が福祉の世界で今があるのは半分、育成会の皆様に育てられたと思っております。また、宮代理事長がいつも口にされていた「さざんか会と育成会は車の両輪」ということを職員としても強く感じた世代の一人です。

法人として初めての小規模福祉作業所「さざんか作業所」開設に新卒の当方へ任せるといふ人事はさぞ不安であったと思いますが、そのおかげと言いますか、適応力や発想力などの基盤が培われたと思います。入職5年後の平成3年に開設した「ゆたか福祉苑」でも立上げから加わり、異動になるまでの15年の間にさまざまな試みをさせていただきました。当時の障害者福祉は措置制度の時代であり、暮らしの部分では「生活ホーム」の話題が開始したころに法人独自で一軒屋を借りて「お泊まりハウスほっと」なるものを始め、自宅以外で泊まるという体験の場として宿泊数を決めて実施していました。時代が令和に代わった今でも「親亡き後」への悩みは尽きません。親御さんの切なる願いに向き合い、その声を聞きながら地域で暮らすことへの道筋を考え、一丸となり取り組んでいたことが現職にも生きていくとっております。

また、現在の移動支援事業ができる以前から個別外出の機会として職員が一对一で終日、ご本人の行きたい場所等へ外出す

るような取り組みを年間通して行っていました。これも職員からの発案に対し、宮代理事長の構想（魔法のランプ立ち上げ）でもあり、それを具体化していったのは当時の職員でした。法人の理念にもある「共に生きる」をどう考えるか、といつも問われていたように思います。二代目高橋理事長、三代目鹿倉理事長とその時々的情勢や施策に向き合いながら、それら一つひとつの取り組みから事業としての運用につなげてきた法人だと感じています。

先にも述べましたが、現在は法人事業と異なる船橋市基幹相談支援センター「ふらっと船橋」で、総合相談支援を含む基幹相談支援事業として船橋市内在住で障害当事者やそのご家族、福祉関係機関等より障害種別を問わず、ご相談に対応しております。種別を問わずという点では、さまざまな市民の方々が相談に来られますのでその内容も複雑で、これまでの施策や関係機関も市内外を問わず、多岐に及びます。地域で暮らすは元より「同じ明日を迎える」という当たり前のことに向き合いながら仕事をしております。多くの方は当たり前に明日は「普通に来るだろう」と思われます。もちろん、その通りです。しかし、悩みや疾病を抱えた方々の中にはその時々（今）を乗り越えることに精一杯という場合もあります。仕事や住まい、金銭問題に人間関係等の問題が大きく暮らしに関与してきます。特にこの機関ともつながりのない「孤立」されている場合などは困っていてもその状況が続いていると、その状態が「当たり

前」になり自身の困り感が薄れてしまうことで、ひとたび問題が表面化すると地域で暮らすということが厳しい局面に陥る場合もあります。相談支援等が関わることでその時期を少しでも遅らせることや他の支援方法などを一緒に考えていくことはできるかと考えます。

この法人がこれまで障害当事者やそのご家族と共に歩んでこられた50年、「親亡き後」への方策として「地域で共に生きる」ということを具現化されてきたのではないかと感じております。「誰とどこで、どのような暮らしがしたいか」というご本人の意思に応じた暮らしの組み立てにはまだ、時間を要すると考えますが、過去の施設での生活一択から、現在ではグループホームでの暮らしをされている方が上回るといった状況にあります。更に可能であるなら福祉サービス等の利用を含めた単身生活もその先の暮らし方の選択肢として見えてきています。「障害の重い方でも地域で暮らせる社会を」と宮代理事長の想いを法人として今後も更に具現化されることと思っております。地域で仕事することで見えてきたことも多く、この場所から法人理念の具現化に寄与できればと考えております。社会福祉法人さざんか会の益々のご発展を祈念しております。

昭和61年さざんか会に入職、「さざんか作業所」及び「ゆたか福祉苑」に勤務。平成18年10月から現職に。

『障害福祉施設に勤務し

自分が変わりました』

さざんか会 本部 泉 一成

私が、さざんか会の職員となったのは東日本大震災のあった2011年7月1日です。けいようまで徒歩50分、鎌ヶ谷市に住居があることから、いざという時のために採用された（私の思い込みです）。いやいや、当時、遊んでいた私に宮代理事長から声をかけていただきました。理事長とは、以前も触れましたが、昭和57年ころ社会福祉法人「桐友学園」の成人施設「沼南育成園」に宮代理事長が通所更生施設をつくるための交流にお出でになったことがきっかけです。なので理事長とは40年来のお付き合いということになります。さざんか会設立から50年。理事長との縁からすると40年は、短いのか長いのか。

私が、障害福祉施設の仕事に就いたのは、昭和53年5月からです。東京都社会福祉協議会に勤務するボランティア活動の先輩からの一言。「千葉県で職員の確保に困っている施設があるから見学に行ってくれない?」。5月1日、見学と思い社会福祉法人「桐友学園」に行くと「人がいないから明日から来てください」と言われ、考えさせてくださいと言つつもりがつい

「はい」と返答。当時、アルバイト勤務していた朝日新聞厚生文化事業団のデスクに報告し、机周りを整理し、「お世話になりました」と有楽町の朝日新聞東京本社でお世話になった方々にあいさつし、5月3日から社会福祉法人「桐友学園」の「沼南育成園」で働き始めました。その後、昭和59年4月に北海道の「白老愛泉園」、昭和60年1月に「桐友学園」に戻り、管理部や児童施設の在宅支援に長く関わりました。

障害児者施設に長く勤務してきましたので、利用者さんと一緒に涙したこともあれば、怒り心頭になったこともあります。障害がある方々にボランティアで5年ほど接していたので多少の知識はありましたが、体系的に福祉を学んでいないので、目の前の障害がある皆さんから多くのことを学ぶしかないと思えるだけ謙虚さを心がけました。40年前は、自閉症という言葉も知らず、福祉の知識も乏しい私は、愛護の通信講座で知的障害の皆さんの特性などを夜な夜な学びました。1年間の通信講座でしたが、元来、本を開くと眠くなるタイプなので、レポートを書くのが大変でした。この通信講座を終えて、弟が軽度の障害があるのではないかと思うようになりました。弟の通信簿は、いつも「1」。心無い私は、また煙突か、と声をかけていました。学校をさぼりがちな私と違って弟は、中学を卒業するまで1日も休んだことがありません。勉強が嫌いだといって中学を卒業と同時に寿司屋に丁稚奉公の道を選びました。弟とは1つ違いで、学校ではいつも兄と比較され、いじめにあい

ながらも1日も欠席せず卒業したことをこの仕事についてから立派なことだと思つようになりました。私は、弟や障害がある皆さんに多くのことを学び少しは成長できました。

皆さんか会に勤務して誇りに思つこと

2011年7月1日からけいように勤務しましたが、現場での勤務は15年ぶりでした。勤務初日は、夕食を済ませたら、午後7時急に眠くなり朝まで熟睡でした。皆さんか会に勤務して、10年を過ぎましたが、誇りに思つことが3つほどあります。

1つ目は、けいようで人が辞めない職場づくりができたことです。

2012年3月山本施設長が退職され、同時にパートさんも数人退職。4月1日からのバスの運転手確保に困り、第2週からやっとマイクロバス2台の運行が再開。しかし、日々5人の常勤とパートさん1〜2名で利用者さん38人ほどの対応で、休憩時間を取るどころではありません。新聞折込やハローワークなどに連絡しながら7月には何とか体制を整えることができませんでした。2012年4月、けいようの職員から「なんとかなりますよ」と声をかけてもらったことが励みになりました。その時に「けいようは、人が辞めない職場にするんだ」と心に誓いました。人財確保、人財育成の仕組みは、50年を迎えるにあたり最も大切なことではないかと考えます。けいよう職員からの励ましは、今でも心の支えになっています。

2つ目は、利用者さんのやさしさです。

けいよう、のまる、ホーム利用者。関わることでできた皆さん一人ひとりのやさしさにうれしい思いや良き経験を楽しませていただきました。「え〜」と深々とお辞儀をする利用者さん、散歩中突然のゲリラ豪雨にずぶぬれ状態を楽しんでいる利用者さん、いつもおはようとおいさつしてくれる利用者さん、皆さんか会の利用者さん一人ひとりのやさしさを今となっては走馬灯のように脳裏に浮かんできます。

残念ながらけいようをして、他法人に移行した利用者さん、手を尽くしたが亡くなられた利用者さん。関わらせていただいたことに感謝、感謝です。

3つ目は職員に恵まれたことです。

けいようとのまるで管理者を担いました。職員は宝であり、人財です。けいようとのまるの職員への感謝は、言葉では言い表せません。

のまるでは、いま、人員が整い4つのユニットに4人の夜勤者を置くようになり、2022年2月から3月の新型コロナ感染症もチームワークで乗り越えることができます。

総じてこの仕事は、温かい家(暮らしの場)と食事、人、がいかに大事なのか教えてくれました。これからも好奇心旺盛なので「本、人、旅」を楽しんでいきたいと思っています。

50年続いたことが奇跡なのではなく、根拠があるよね、と思えるよう皆さんか会が一意専心の道を歩くよう見守っていき

いよいよ誓います。

『笹川なずな工房 今昔』

笹川なずな工房 前施設長 荒井 道貴

1 はじめに

社会福祉法人さざんか会が、創立50周年を迎えました。また、ここ「笹川なずな工房」も今年創立21年となります。歴史はただ時間が過ぎただけではなく、そこに関わった多くの人たちの努力や苦勞の積み重ねの上に今があります。しかし、人の記憶は徐々に薄れ、消えてゆき初心が分からなくなってしまうこともあります。それをふせぐために記録を残し、映像を残していくことはとても大切な作業です。社会福祉法人さざんか会創設50周年にあたり当「笹川なずな工房」の歴史を振り返ってみていきたいと思います。

2 源流

「笹川なずな工房」の源流の最初の一滴は、「北総育成園」で実施した地域相談事業にあります。平成元年、当時は知的障害福祉の主流は入所施設で、通所の施設はまだまだ少ない状態で

した。ここ東庄町でも養護学校（現特別支援学校）や特殊学級（現特別支援学級）を卒業した後の進路に困るのが実情でした。そこで千葉県独自の施設として始まった「地域相談事業」を活用し、地域の利用者が日中北総育成園の作業活動に参加するようになりました。この活動は評判を呼び、毎年一人二人と参加する利用者が増えてきました。10年も過ぎるとその参加者も二桁の人数を超えてきました。東庄町からも地域福祉の新しい通所施設の設置に強い要望がありました。そこで、武井園長はお世話になった地域への恩返しとして、笹川の地に通所授産施設を作ることになりました。

3 新施設の建設

新しい施設を作ることには容易なことではありません。法人内での調整。地元行政との意思の疎通。千葉県との連絡・打ち合わせなど多岐にわたります。一般的に施設の設立で一番の問題となるのが地元住民の理解です。しかし、「笹川なずな工房」建設の時には全くと言っていいほど問題はありませんでした。「北総育成園」はすでに地域の一員として、受け入れられていました。北総主催の「盆踊り大会」や「さざんか祭り」は、地域の行事として認知されてきました。多くの方がボランティアという形を含め参加してくれました。また「北総育成園」から

も、地元祭りの集会に参加させていただき、福祉施設というより、一軒の地域住民として交流をしていました。

施設の建物もコンクリートで固めたいかにも施設風の建物でなく、地域の景色に溶け込んだものを模索していました。建設の前年に行った作業班旅行で見学した「塩原太助」の旧家に武井園長がヒントを得て、農家の古民家を模した木造、漆喰造りを基本とした二階屋と



●施設然としない建物、「笹川なずな工房」が誕生しました。

しました。内装も生木をふんだんに使った構造となっています。一見施設とは見えない建物のため、初めて来所される方は気づかず、施設前を通り過ぎてしまつ方が多くいられました。

4 笹川なずな工房の名称

「笹川なずな工房」には「なずな」のミドルネームが入っています。原案では「笹川工房」が有力でしたが、同名企業が存在していたので名称変更の必要性がありました。そこで武井園長が知的障害福祉の先駆者である長崎純心女子大学教授の近藤原理先生にお願いし、「なずな」の名称をいただきました。近

藤先生は私費で日本初の知的障害者生活寮「なずな寮」を開設し、自宅で障害をもった人たちの生活を支え、自然農業を利用者と共に営んできました。福祉は平和であつてこそ成り立つものであり、利用者を大切にすることは平和を守ることです。具体的には自然を慈しむこと。無農薬農業や炭素を出さない生活。今叫ばれている「SDGS」（持続可能な生活）を50年前から提唱・実践してこられました。北総育成園・笹川なずな工房の職員は交代で近藤先生主催の「なずな研修」に毎年参加をして近藤先生の平和の思想を勉強し継承しています。

5 消えてなくなるものに渾身の力を注ぎ

栃木の「こころみ学園」の故・川田昇園長は「消えてなくなるものに渾身の力を注ぎ」とおっしゃっていました。消えてなくなるものは食べ物だけではありません。利用者と職員の間関係性もその一瞬が勝負です。一期一会。パンを作っても全く同じパンは二度とできません。気温や湿度、小麦粉の性質で毎回違いがあります。利用者との関係も日々変わります。その場に最も相応しい支援をする。これは名人芸です。しかし名人になることは困難です。でも利用者に寄り添つことで、支援のベテランになることはできます。日々共に働くことで利用者の立場となる職員。

6 生産活動の活発化

作業は創立当初農耕作業、製パン作業、紙工芸作業を二本柱に活動をしてきましたが、徐々に生産性換金性の高い前二者に重心を置くようになり、平成17年頃には2班体制が確立しました。

幸いパンも農産班の主力のジャムも大変好評でした。近隣役場や特別支援学校での訪問販売が中心でしたが、徐々に評判が評判を呼び、企業や小中高등학교等からも販売要請がきて毎日3〜4か所販売に行くようになりました。もちろんそのため生産量も増えていきます。気がつくとも年間2500万円を超える売り上げを記録しました。この数字は定員20名の小規模な施設としては上限です。それは大変なことですが、毎日当たり前のこととして淡々と仕事をこなす。それが利用者や職員の力を高めているのです。

またイベント販売でも高い販売成績を上げました。秋季シーズンは毎週イベント販売が入ります。日常の生産のほかに、週末のイベント販売が入るので大変です。特に文化の日の東庄と山田町ふれあい祭りでは、1日で63万円以上の金額を記録しました。当施設の製品を楽しみに来場してくれる方も多くいらっしゃいます。そんな積み重ねが大きな数字となりました。

そのために工賃も高い金額を支給することができました。県内には就労継続B型施設が320カ所ほどありますが、平成30年には上位12位に入ることができました。利用者のコツコツと

愚直なまでに一生懸命に働く姿勢がこの結果を生みました。

当施設の歴史を語る上で、特筆すべきことは、平成22年度に受賞した「ハートフルメッセオブザイヤー」で、当施設のジャムセットが大賞を受賞したことです。高評価のポイントとして地元産の原材料にこだわったこと。一切の添加物を使用しないで素材の持つ味で勝負したこと。全くの旧態なる手法で機械化とは無縁のていねいな手作り製法で作ってきたことが挙げられます。また世界的な高名なデザイナーである副田高広先生がぜひ当施設の製品を応援したいと作っていただいたラベルのデザインも特筆ものです。

7 目標は就労

平成23年に新法に移行した時には、就労継続B型支援と就労移行支援を選択しました（現在は就労継続B型支援と生活介護）。作業活動で力を付けた利用者が就労を目指すのは当然の方向性だからです。以来就労者は5名を数えました。人数的には多くはありません。それは人数だけ増やし失敗をしてしまうことを避け長く働く力を養成してきました。そのため高い定着率（3名は在職。2名は事業所都合で退職）となっています。上記で記したように当施設での作業は高いレベルの質を要求されます。それを乗り越えた人たちだからこそ、どの企業にいても高い評価を得られています。

8 憧れのハワイ航路へ

作業以外での大きな出来事は、平成25年に実施したハワイ旅行です。働くだけでなく、生活の幅を広げようと海外旅行



● 皆で行った「ハワイ、旅行。楽しい思い出が、たくさんできました！

を実施しました。すでに「北総育成園」では数回の海外旅行を実施して、その下地は

あります。無限大の可能性に向かって、利用者の希望が強

かったハワイ旅行を実施しました。就労支援系の施設の本

分は作業支援をして高い工賃を支給することで利用者の生

活を豊かにすることですが、工賃を有効に使う点との観点

では、弱さがあります。そこで、自分で稼いだ工賃でなか

なか実現できないことを成し遂げようとハワイ旅行を計画しました。計画は1年がかりです。そしてハワイの情報をみんな

みんで調べ、どこを見学したいか話し合いました。すべて手作りの旅行です。多くの

利用者は初の海外旅行です。興奮してねられない飛行機の中。2月なのに暖かい気候。そして日本では見られない風景景色。そしてエンターテインメント。夢のような5日間でした。今や海外旅行は珍しいことはありません。ただ今回の旅は自分が働いたお金で、自分が見たいことを選んで実行したことに価値があります。また一つ可能性を開いた出来事でした。

9 コロナを乗り越えて

2年前に発生したコロナ禍は、施設の在り方を一変しました。1か月半に及ぶ施設閉鎖・自宅待機によって、利用者の体力低下からの回復から始めなくてはなりませんでした。環境整備や散歩が最初の日課です。そこから「北総育成園」の給食注文に始まり、徐々に外部からの注文も増え、パン作りやジャム製造が始まりました。本当に遅々とした進みですがそれでも前に進みます。コロナウイルス感染予防のため対面販売はやめ、注文販売のみとしました。さらに毎年行っていた秋のイベント販売は2年にわたって中止です。令和4年度も開催の予定はありません。販売場面が減ることは生産量が減ること。同時に利用者の活動場面も小さくなっている現状は仕方ありません。それでも近隣のイチゴ園様や地元学校給食センターからの大量の注文が入り、徐々に以前の活気を取り戻し始めています。

10 未来に向けて

開設から20年が経ち「笹川なずな工房」も転換期がきています。がむしゃらに前だけを見て進んできましたが、利用者もベテランになりました。新型コロナウイルスのため社会も今まで

『わづなか会50周年』

北総育成園 副園長 白樫 久子

私は船橋市で生まれ育ったが、さざんか会のことは入職する時に初めて知った。「北総育成園」は船橋市の施設だが、80km離れた香取郡東庄町にある。その設立は、「船橋市手をつなぐ育成会」が必死な思いで活動し社会福祉法人さざんか会が歩んできた歴史だということを、多くの機会に保護者の皆様から伺ってきた。私が中学生の時、友人と船橋市民ホールに、福岡県の「しいのみ学園」の実践映画を見に行ったことがある。今にして思えば、育成会の皆さんが運営していた映画会であり、きっとその中には北総のお母さん方がいたのだろうと思う。そしてさざんか会初代小名木理事長はじめ歴代理事長、現宮代理事長、諸先輩たちが築いてくださったからこそ我々は今このかけがえのない障害者福祉の仕事に就くことができている。

とは違う構造になってきました。先の見えない中でのまさに暗中模索の状態です。しかし、我々の先達も福祉制度が何もない中で社会を切り開いてきました。いつまでも利用者に寄り添って共に生きる「笹川なずな工房」でありたいと思います。

若い頃はそんな風に考えることもなく、毎日利用者さんとの作業や生活に汗を流していた。やがて私自身も子を持つ親となり、この仕事を続けてくることができたのは、先達の皆様のお陰である。本当に長い歳月の尊い活動に、心から尊敬と感謝の思いで一杯である。

「北総育成園」は、初代天羽園長から、「施設は親のものでも行政のものでもない。ここに暮らす一人ひとりが精一杯の力を発揮して大人として働き、仲間とともに充実した生活を送る場所である」という理念のもとに、具体的な実践を展開してきた。農耕班・園芸班・手芸班・木工班・陶芸班・林産班・紙工芸班・ありのまま芸班。全員がいずれかの班に所属して仕事をし仲間を育んだ。職員もみなその作業から多くのことを学んできた48年間だ。

18歳で入所してきた利用者さんも48年たてば66歳である。ご両親が亡くなったり病気になるれたり、ご本人達も高齢化介護化が進んだ。高齢者施設や病院に移った方、亡くなった方も増えた。介護保険が施行された平成12年頃から北総も高齢化の波が高く見えてきた。平成20年にその時72歳だったSさんが特別

養護老人ホームに移行した。歩くことや食べることもままならなくなり女性職員中心に懸命に介護を続けてきたが、□から食事をとれなくなると、北総では医療ケアは難しい。ご家族と相談して東庄町内の施設に移行し介護を受けることになった、Sさんは全日本手をつなぐ育成会を立ち上げたお母さんの次女。戦後の厳しい時代に、障害をもった長女次女のために、教育と福祉の場を開拓されたお母さんであった。

それから北総では毎年要介護・入院・手術・ご家族の不在化など、高齢者が増える入所施設ならではの課題が山積してきた。これらは一施設だけでは到底解決できない。ご家族、医療機関、行政、地域、介護施設等と連携し対応してきた。ご本人にとってより良い選択肢は何だろうか。北総を立ち上げた皆様の思いに近づけているのだろうか。時代は大きく変わった。法整備も、障害者福祉の捉え方も変遷した。しかし、子を思う親の愛はいつの時代も深く尊い。親御さんしかできないことも多いが、親御さんだけではできないこともまた多い。その思いが、「さざんか会」と「北総育成園」の源流であることをこれから大切にしながら業務に精進していきたい。

私が入職した昭和60年は創立10周年。当時在園者は50名、20歳代30歳代の利用者さんが多かった。職員も然り。一番年長のMさんが60歳で船橋市内の高齢者施設に移ることにになり、先輩職員と厚手の下着や衣類を準備したことがあった。それから30数年後の北総は、平均年齢が約56歳となり、60歳以上の利用者



●北総育成園の紙工芸班が手掛ける「干支人形」、今年は「トラ」が完成です。

が約4割在籍している。最年長は83歳、ご長寿のお二人である。高齢化介護化対応はそれぞれに課題が多い。全国で高齢者問題が逼迫しているのだから、障害者入所施設も然りである。

そして北総では、「働くこと生きること」つま

り仕事と生活と共に、余暇と文化活動も大切に実践してきた。昭和の時代から先輩達がつけてくれ、長く活動してきた演劇クラブや音楽踊りクラブ。私が担当した演劇クラブの演目は「傘地蔵」「泣いた赤鬼」「夕鶴」「大吠太郎」。20年以上県内だけでなく、東京・広島・長崎他での発表の機会をいただき、海外では平成4年韓国、平成7年デンマーク・スウェーデン、平成11年ハワイ、平成14年中国に渡った。そして平成16年の北総育成園30周年行事の発表をもって活動を終了した。ダウン症の方も多く、徐々に高齢化と体力の限界が見えてきた。その時のメンバーの半数は今、空の上で私達を見守ってくれている。必死に舞台を作ってきたあの頃はつい最近のように、照明に輝いた笑顔と拍手に包まれた舞台が思い出される。時々あの頃の写真を眺めると、あの熱気ある緊張感や高揚感が蘇ってくる。今の仕

事の心の支えであり、これからの私への温かいエールである。

平成24年から27年にかけて、船橋市事業としてバリアフリー新棟建設と既存棟大規模改修工事が施工され、3階建、全室個室の施設に生まれ変わった。利用者さんがより快適に過ごせる環境が整ったのだ。保護者の皆様も大変喜んでくださった。これからもこの住環境を大切に維持し、整えていくことが我々の責務である。

令和2年3月の新型コロナウイルス感染では、この住環境があったからこそ施設療養が実現した。それは辛く厳しい体験で、私達はかけがえのない大切な人々を失った。その悲しみは癒えることはない。多くの皆様からご指導をいただき、全国の皆様か

『むねんか会』

創立50周年記念誌にて

笹川なずな工房 施設長 羽生 真弓

社会福祉法人さざんか会創立50周年おめでとうございます。法人誕生からの長い歴史の中で、私は北総育成園でお世話になり「笹川なずな工房」、「野の花」で職務させていただいてきました。初めての北総訪問は、8月の暑い夏の日でした。緊張と

らの温かい激励と応援のおかげで、乗り越えることができました。利用者さんを必死に守るため防護服に身を包んで汗を流す素晴らしい職員さん達と共に乗り越えることができたのだ。大変心配をおかけしました。本当に有難うございました。心より御礼申し上げます。

北総の里は、豊かな自然と温かい人々の優しさに囲まれている。美しい緑と澄んだ大空と明るい太陽が我々の生活を見守ってくれている。さざんか会50周年の歴史の重みを噛みしめて、障害をもつこの人達に寄り添う支援の日々を今後も一歩ずつ進んでいきたいと思えます。

不安はマックスで食堂から続く廊下を歩いていると響きわたる賑やかな声。明日から茨城の御前山へキャンプに行くという準備を当時の2人、3人部屋の居室でうれしそうに楽しそうにリュックやカバンに衣類の用意をしているところでした。中央ロビーでは思い思いにくつろぐ昼休み時間。「こんには」とあいさつするとニッコリ笑って応えてくれたあの時の利用者さんの表情は今でも鮮明に覚えています。人と接する時、見学や初めて来てくれた方はとても緊張している。できるだけ笑顔で迎えたい。接したいと思うのはこの時、味わうことができた対面があるからです。作業は農耕班に所属。野菜ができるうれしさは楽しみで仕方ありませんでした。山の木の中に不思議な実

をつけている物体が「アケビ」という食べ物だと作業と一緒に
行っていた武井園長が教えてくれました。土に触れ、どころ
か？ 少し狭い畑はトラクターが入りづらい。ということでもス
コップを使つての土の掘り返し。「嘘でしょー？」と真剣に思
いましたが、チーフの指示は真剣で「狭い畑だし土が硬いから
一掘り一掘り返して」というもの。6人の利用者と私で一列に
並んで掘り返していきます。食堂や廊下掃除をする時の走りが
けに習って、一列に並んで「よいっしょっ」と、「せーの」声
が出ている時は勢いもありますが、進むにつれて静かな時間が
続いた時「しょないなー せーの！」と、元氣な利用者さんが
声をかけます。「がんばろ〜」と続きそれに合わせて、掘り起
こされた土が大半を占めるようになった頃、畑の天地返しが完
了。別動隊で作業をしていた先輩職員さんが迎えに来てくれま
した。「すごいなー よく終わったね。明日、次の工程に入れ
るよ」と驚嘆の声で話されていました。達成感を感じてうれし
くて仕方ありませんでした。頑張つて利用者さんと一緒に任せ
られた作業が終わった、そして褒めていただけただけなこと。それが
うれしかったこと。作業を通してやってみる機会、頑張った過
程、結果を認めて褒める。という大切なプロセスをこの時の体
験があり、よく思い出します。これを夕暮れのスコップを手に
畑に立つ「荒野の七人」と思っています。紙工芸班を担当
した時は牛乳パックから本物の和紙作りへと転換の時、茨城に
ある和紙の里さんへは何度も研修へと行き原料の楮こうぞについて教

えていただきました。夏の研修機会を利用してあちこち行きま
した。埼玉の小川和紙からは、実際に農耕トラック一杯分の楮
を分けていただき植えました。北総の地に楮を植えよう。その
原料探しに奔走していた時、土佐和紙で有名な、いの町の組合
と連絡が取れ買い付けに行きました。四国の山間を、地図を見
ながら車を走らせたどり着いた感じでした。この時は夏でした
が植え込みは冬場。シーズンに合わせて送ってくれると約束。
土佐和紙の原料が笹川へ来る。その時、聞いてみました。「千
葉で育つても、これは土佐和紙の楮と言つんですか？」職人さ
んは「千葉で育てば千葉の和紙になるよ。頑張つてやりなご
い」と。後継者問題が深刻な状況。親身に相談に乗ってくれま
した。北総楮の誕生です。祖谷峡の絶景、ジャングルにかけら
れたようなかずら橋、道なき道を走って出てきたら金毘羅様の
参道で驚き、スリル満点でした。四万十川の日本一キレイとい
われる渓流を見たかったが台風接近に奇しくも断念。瀬戸大
橋・香川県から愛媛に入り高知を拠点に徳島へと折角の高知を
堪能、こういう機会を研修という場で見、文化活動の演劇では
練習を通して舞台に立つ演者の利用者さんみんなに感服でした。
一スタッフとして帯同しながらいつも背中がゾクゾクとした身
震いがありました。担当している音響をミスしてしまった時は
本当に申し訳ない気持ちで溢れました。なれーを担当する白樫
さんが盤石なフォローや、職員の流れ石のフォローに役者の息遣
いでペースを自分たちのものにできる力は、すごいなーと思う



● 今日も「なずな」の美味しいパンが焼きました。

ばかりのすごい！ すごい！ です。夕鶴、犬伏太郎、姥捨て山、笠地蔵、どれも心に染みる作品です。それらを引き下げ日本各地はもとより韓国、デンマーク、ハワイでの公演に参加させていただきました。ありがたい貴重な体験を得ています。生活の中でロッカー整理を通して気付いたことは、職員のやり方ではなく利用者さんのやり方を覚えること。毎日毎日、同じことの繰り返しでも「消えてなくなるものに渾身の力を注げ」武井園長がよく話していました。利用者さんのやり方を覚え、そこに少し加えることのできるにやるいにするやり方に変えられるようにしたい。その時間でした。時が経ち今は感染症という通常の生活がままならない抑制した日常生活が続いていますが視野を拡げ、見分を広げ、自分を育てる環境作りの大切さを教えてくださいました。

「笹川なずな工房」では北総での時間を遥かに超えた時間をお世話になっていきます。入所施設の「北総育成園」は担任が何より大事な利用者さんとの関係と関わっていましたが、通所である「笹川なずな工房」は朝、来て日中活動をし夕方帰る、

を繰り返す施設。毎日グリセットされ一日が良くも悪くも始まる。この淡白なまでの利用者さんとの関わりが、物足りなくて寂しくて本当に慣れませんでした。

自分の中での葛藤がしばらく続く中、笹川の地で、焼き立てのパンの製造・販売・地元の果実を使ったジャムや加工品作りに、利用者さん・職員・保護者の皆さんの大きなバックアップをいただき、「おいしいパンがあるよー」と。製造・納品・販売と利用者さん一人ひとりの頑張りか形となり現れてきました。できるか？ これでもいいのか？ わからない時は、荒井施設長が言います。やってみよう。を基本に、個々のできることや得意分野に工程を細分化することで力を付けてきました。それが、顕著に見られるのが秋の各市町で行われるイベント販売準備となります。九月の最終日曜日～11月の最終日曜日まで、丸々続くイベント販売は多い時には、土曜日、日曜日で3場面の準備となります。中でも11月3日に同じにして開催される地元、東庄ふれあい祭りや山田ふれあい祭りは、両場面で作り出すパンの数量は、数え切れなく年間通して一番忙しい日！ と位置付けられています。作っても作っても、たくさん袋入れしても、どれだけ運び込んで？ と思っても、現地で販売している職員からは、「パンできたらどんどん持って来てください」の電話が入ります。この日は一日中この繰り返しで工房内も活気いっぱい声が響いています。「よーし 頑張るぞー」とその日のイベントに向ける声かけの大切さ、できた喜び！ 売れる

楽しさ！ をたくさん味わえるように精いっぱい頑張ろう。会場の雰囲気を感じ作り手、販売してくれる保護者の皆さん、ボランティアさんの笑顔いっぱいに弾んだ声を聞くのも良い刺激になり、工房へ戻ってきた利用者さんは□々に、「すごいよ。一杯売れてるよ」とみんなに伝えてくれます。そこからまた、作業のギアが上がるのです。毎日は通常の作業に励み、2か月に及ぶ週末のイベント販売の準備に弱音を吐くことなく、むしろ意気揚々と作業に励むみんなに敬服です。この日、この時に照準を合わせ鼻息荒く向かっても簡単に成果が出ることはないこと。日々の積み重ねがあつて成し得る大量生産、時間に追われながらもやり遂げられる持続力と集中力。パートごとに担当を分け任せられ培われた各自の自信。自分の仕事の位置付けをきちんと分けてやることはつきりとあることの必要性和大切さ。細分化して工程は増えてもみんなが、そこに入ればその工程が当たり前になる。それは自ずと○○さんの仕事となりま

す。役割のある暮らしの実践。利用者さんの頑張る姿。職員のとくましいやる気と頑張り。そんな力の結集がこの秋のイベント販売での成果となつていました。この2年はコロナ禍の作業、イベント販売は全滅でこの光景を見ることはなかった。1月の土曜日、青年の主張と題し「利用者さんの考えを聞かせてください」と困っていることはないか？ 作業は？ 就労は？ と思っていること何でも聞きます。とポスターを作り、あらかじめよく考えてほしいとこの実施を告知。思い思いのこ

とを教えてください。欲しいものがある。工賃貯めて百色の色鉛筆が欲しい。ゲームのソフトが欲しいから貯めるの。来年の作業はパン班でやってみたい。○○作業やってみたい。などなどいろいろです。将来のために電車を再開したい。もう少し作業時間を確保してください。工賃アップ。とズバリ本音が現れます。貴重な意見です。どう対応できるか？ 職員も考えます。コロナ禍の今、もう少しこの現状は続くものと説明し来るべき時に備え「まず、やってみよう！」作業の中で挑戦してみる。作業スキルを上げていくことで了解してくれました。

忙しい作業は大変ですが、私にはどうしても忘れられない言葉があり、ある販売に同行してくれた利用者さんから「あんまり売れなかった。暇って大変だね」と言われたこと。時が経ち今の「笹川なずな工房」も変わってきていますが忙しい時こそ、生き生きとした表情で作業を進める利用者さん達がいること。就職したいからと励む利用者さん。少しのゆとりを日中活動に取り入れ、健康面のバックアップを含めた活動を取り入れた動きは多機能ですが、利用者さんの気持ちに寄り添い共に育む日々は「笹川なずな工房」も、グループホーム「野の花」も変わりありません。今こうして振り返りここに記させていただける機会をいただきありがとうございました。またここから一歩、歩んでいきたいと思えます。

『働くことは生きること』

北総育成園 支援課長 高木 恭一

私は平成元年の4月から北総育成園で働いています。その年は、北総育成園が開設して15年が経過し、定員が50名から75名に増えた年に当たります。それまで五つだった作業班に椎茸栽培を中心とした「林産班」、和紙製品を作る紙工芸班が加わり、「働くことは生きること」の毎日でした。それは若かった私にとっても楽ではない本格的な労働だったと思います。

その数年後に当園で行われた千葉県知的障害者福祉協会の



● 今日も作業に汗を流します。農耕班、作業風景です。

研修会でのこと、他施設のベテラン職員さんが言われた、「北総さんは以前に見学したとき、生活指導を重視した施設だとの印象でしたが、作業も力を入れているんですね」との言葉が印象深く記憶に残っています。おそら



● 丹精込めたシクラメン、が今年もきれいに咲きました。

と、あらゆる可能性を追求してきました。かなり欲張った取り組みでしたが、中でも中心にあったのは「働くこと」だったと思います。

私自身が心掛けてきたことは職員が本気で作業に取り組み、売り上げにもこだわることです。その姿に刺激を受けて利用者も一緒に作業を頑張り、売れば一緒に喜ぶ。決して職員が現場監督になってしまっただけだとは思って取り組んできました。

その後、海外も含めていろいろな所に旅行に行けたり、地元祭りに夜遅くまで参加できたりしたのも、作業を通して身に付いた丈夫な体と心があればこそだと思います。しかし人間は年をとればどうしても衰えが出てきます。若い頃は平気でできたことがぎつくなってくることも多いです。この10年、北総で

は「何を減らし何を残すか」に悩み続けてきました。遠くへの旅行や夜の行事はなくなってきました。それでも作業については、無理はしないものの「健康維持」や「生きがい」の観点からも週5日間作業という仕組みは維持してきました。

それが令和2年のコロナ禍では、作業も余暇活動も自治活動も全てがいつぱんに無くなってしまいました。今は非常時と、利用者も職員も耐える中、半年後にようやく午前中だけ作業が

『30年を振り返って』

北総育成園 事務課長 飯田 好江

さぞんか会創立50周年の半数以上の歳月を北総育成園で勤務させていただきました。私は30年前に入職しましたが、初めは非常勤として、午前は利用者の預かり金の管理事務の手伝い、午後は園芸班にて利用者との花の手入れ等の作業をしました。香取神宮の花壇に利用者と共に花を植えに行ったり、県民の森に落葉を拾いに行き園にて堆肥作り、隣町のシクラメンを作っている園芸所に行きシクラメンの手入れの仕方を皆さん忙しいところ、一から教えてくださいました。時には作業中に居なくなってしまう利用者もいるので追いかけることもあり

できるようになりました。朝は「いつてきまーす！」の元気な声が響き、昼に館内に戻ってくる、「ただいまー！」「〇〇やってきたよー！」と報告してくれます。その様子を見てみると、ようやく少しだけ普通の生活に戻ったと安堵し、働くことは生きることそのものだと強く思いました。これからも働くことを中心に据えて、皆と共に豊かな人生を歩んでいけたらと思います。

ました。紙工芸班では楊枝入れや箸入れに付ける人形を折ったり、利用者との楮叩きをしました。楮叩きはとても大変で、それを一日叩いている利用者はすごいと思いました。作業後は居室の時間、今のような新棟はなく本館のみ、みんなで一室に集まりロッカー整理や衛生点検、雑誌を見たり作業での出来事を聞いたりして過ごしました。一か月に一度の夕食・料理会、作業が終わったら大急ぎで着替えて出発しました。春はお花見をしてから店に行き、各自がメニューから好きな食べ物を選びみんなうれしそうに食べていました。ある時はカラオケボックスで食事をしながらカラオケ大会、みんな歌うことが好きで次から次へ歌っていました。料理会では天ぷらを揚げることになり、ある利用者さんが野草を揚げると言い自分で作業終了後野草を摘んできたので、最初に野草を揚げてあげたが、他の揚げ物をしているうちに別の利用者さんが食べてしまって、野草を摘んできた利用者さんはがっかり。でも一個だけ残っていたのでそ

れを食べておいしかったと納得してくれほっとしました。また、いろいろな餃子を作ろうと話になり園芸班に明日葉があったので、「明日葉餃子」を作ってみたがまずかつたのを覚えています。料理特訓では、お米のとき方や包丁の使い方を一対一で教え、ご飯・味噌汁・目玉焼きを自分の手で作り食べる。美味しくできて本人はご満悦でした。利用者とのやり取りはとても楽しかったし、利用者の笑顔を見ると私まで笑顔になりました。

平成17年より常勤職員として事務職に、前任者の手伝いをしていたが、経理関係の勉強はしていないので全くの素人で、書類の見方もわからず法人事務よりご指導いただいたり、一年やってくる事ができました。18年には事務の新職員が入職し一緒に勉強しながら頑張ってきました。会計士の先生が付き分からないことなどは先生に相談でき、わかりやすく説明してくれるため徐々に力がついてきたと思います。これからは後任者に私が今している仕事の内容を共有して引き継いでいきたいと思っています。

保護者の皆さんとの出会い、毎月電車を乗り継いで二時間以上かけて園に面会に来る親御さん、保護者会には大勢の保護者皆さんが来園し子どもに会い職員と懇談、保護者の方々の話はとても楽しかったです。行事の時には保護者の皆さんも手伝いに来てくれました。保護者と一緒の写真がたくさんあり見るたびにあの時のことが思い出されます。我が子を思う親の気持ちを考え、利用者と接するときは親御さんのことを考え接

していきたくと思っています。現在は保護者の皆様とは新型コロナウイルスのため、なかなか会うことができず電話での会話のみですが元気そうな声を聞くことができうれしいです。コロナが収まり早くお母さん達に会える日が来ればいいですね。令和2年の新型コロナウイルス集団感染の時には、いろいろな誹謗中傷がありましたが、それ以上に応援してくださいました様に感謝します。これからも健康面に気をつけて、仕事をしていきたくと思っています。



『さざんか会』

創立50周年記念に寄せて』

野の花 管理者 興 梶 孝

この度は、社会福祉法人さざんか会が創立50周年を迎えられたことを心よりお祝い申し上げます。

私がさざんか会にお世話になりましたのが平成11年4月のこと。それから早20年の月日が経ちました。「北総育成園」、「笹川なずな工房」でいろいろな経験をさせていただきましたがその中で今回はグループホーム「野の花」について触れたいと思います。

「野の花」が開所したのは平成27年9月1日です。木造平屋のぜいたくなつくりの建築物。遠くからでも一目でわかるその佇まいは、笹川の地でも一位二位を争うのではないかと、それくらい立派な建物です。

法人の中では16番目とそれほど珍しい事業ではありませんが、この地においては初めてのことでしたので不安の中スタートしたことを思い出します。私自身、それまでは「北総育成園」でお世話になり支援員として利用者さんと共に作業にいそしんできたので、共同生活援助はこれまでと違った運営なりどうすれ



● 東庄町に建てられたグループホーム「野の花」、とても豪華なお家です。

ばよいのか？ 右も左もわからない中で、これまでの入所施設で培ったことを少しでも生かせればと思い準備してきました。

また、グループホームの運営に関しては法人のホームで実習をして運営についてたくさん教えていただき何とか開所にたどり着くことができました。

スタートは3名の利用者、4名の世話人さんを迎えての生活となり、みなさん新築のホームに足を踏み入れ、ため息と歓声が入り混じった何とも言えない空気がそこにはあったことを思い出します。

「野の花」の当初の目的は「就労して、ここから通うことができるグループホーム」でした。実際に就労して、ホームから通勤をした方は2名。（現在は1名です。）社会に出て働く

厳しさや、素晴らしさは実際に就労しないとわからないと思います。就労先までの通勤路の確認、仕事先の上司との報連相、悪天候時の対応など今でこそ「就労定着支援事業」がありますが、当時は就労移行支援事業所と近隣の就業センターと連携して就労後のフォローまでを「野の花」で担っていました。就職して最初は良い顔して仕事に行くのですが、1年経ち2年を迎えるころには無断外泊、無断欠勤が続くようになり本人の意向も踏まえ退所した利用者もいました。開所から6年と半年が過ぎようとしています。現在は、障害の重い方も入居できるようにスプリングラー設備等整備をして就労系から生活介護まで幅広い分野の利用者が利用しております。個々の支援を密にこれからも関係各所と連携を図りながら運営していきたいと思えます。

さて、東庄町は人口約1万3000人の小さい町です。その中のグループホームですから近隣の方々も気にかけてくれます。時に最寄り駅の駅員さんも利用者さんの名前を覚えてくれるほど日頃からたくさん声を掛けていただけることも大変ありがたいです。「裏のおばあちゃんが小松菜くれたよー!」「隣のおばあちゃんが大根くれた」と常日頃から一軒の家としてお付き合いしてくださいませ。利用者さんも休みの日には地域の方たちと立ち話をしている光景も当たり前のようでした。地域に根差した関係づくりは野の花が作ってきたものではありません。昭和49年から、根方区の一軒の家として地域の中で活動をしてきた

「北総育成園」があり、平成14年から地域に根差した販売活動を行ってきた「笹川なずな工房」があったからこそ。「日曜日ごとに地域の草野球チームと北総の職員利用者の連合チームと練習をしていた」と「北総育成園」武井園長から伺ったことがあります。なんてぜいたくな話なのだろうと思えます。そんな当たり前のこと、しかしとても大切なことを先人たちが築いてくれました。私たちも大切にしていきます。普段行き会った時のあいさつをこれまで以上に大切にしていきたいです。

私自身グループホームを担当したことでさまざまな研修で学ぶ機会をいただけたことが思い出深いです。中でも日本グループホーム学会の研修に参加したことは私の人生においても貴重な経験をさせていただきました。仙台、名古屋、東京と全国各地で研修が行われました。特に沖縄の研修は宮代理事長のお供として講演を拝聴させていただけたこと、研修だけに留まらず、沖縄の米軍基地問題を肌で感じる機会を得たことも貴重な経験でした。辺野古の美しい海を米軍基地建設のために埋め立ててしまったら二度と元に戻すことのできないこと、基地の存在が沖縄の人々にとつてどれだけの影響を及ぼしているか。沖縄の夜に皆さんで囲んで泡盛を飲みながらそのような話をしたこと

も大切な思い出です。
最後に、開所してわずか6年のホームです。これから、どのようなドラマが待っているのでしょうか、その一つ一つを大切に利用者さんが主役となるように「顔を立てる。立つ瀬を残す。

おりあいをつける」この言葉を胸にこれからも継続していきたいと思えます。地域と共に、地域の中で暮らす。当たり前を当たり前と思わず日々努力していきたいと思えます。

『地域の中で育つこと 地域の中で暮らすこと』

のまのまホームズ・

とらのこキッズ 管理者

中川 公一

私自身は昭和60年4月の入職ですので、今年で37年目の勤務となりました。昭和58年4月に児童通園からの事業転換で、当時精神薄弱者通所更生施設「京葉学園」での勤務で仕事を始めさせていただきました。

当時「京葉学園」は京成西船駅から徒歩すぐの住宅地にある「宝成寺」敷地内にありました。ご承知の通りこの地は「船橋市手をつなぐ育成会」の拠点でもあり、法人と育成会は車の両輪。今の時代には馴染むかどうかは分かりませんが、施設の業務も育成会のイベントでのお手伝いも全部が仕事でした。夢中になれる楽しい仕事でした。

さざんか会との出会いは、入職する前の年、昭和59年でした。

未筆ながら、さざんか会の一層のご発展と皆様方のご活躍を祈念致しまして、お祝いの言葉とさせていただきます。

学生時代の恩師（現九十九会理事長・荒木直躬先生）に就活で北総育成園を勧められ、「さざんか祭り」のボランティアに行かせていただきました。お祭りのコーナーに、普段の北総育成園の様子を8ミリ映写する出し物があり、そのコーナーの担当を、北総育成園の保護者の方と一緒に手伝いすることを任せられました。ご一緒された保護者の方（お母さん）は、とても物腰の柔らかい方で、初対面の私に「遠い処から来てくださったのね。ありがとうございます」と深々とごあいさつをしていただきました。その日一日をその保護者の方と「一緒にすることになり、途中で「一人暮らしでしょ。これ持つて帰らない」と、北総の農耕班で収穫さればかりお野菜をたくさんいただきました。また途中に豚汁等もいただき「足りなければお替わりもらってきますよ」とお気遣いいただきました。当時一人暮らしをしていましたので、その保護者の方のお優しい振る舞いに感激したことを覚えています。

結局その後私は「北総育成園」でなく、「京葉学園」に就職することになったのですが（どうして京葉学園なのか？ 長い話になりますので割愛いたします。）、入職の際に伺った京葉学園の2階応接室（育成会事務所）には、「さざんか祭り」で

一緒だったお優しい保護者の方が笑顔でお迎えくださいました。その保護者の方は、千葉県手をつなぐ育成会会長で、船橋市手をつなぐ育成会でもあり、そしてさざんか会理事長の小名木博先生でした。びっくり仰天。驚きました。誰も教えてくれなかった。(というより自ら調べもしないで就活し、就職している能天気さ。良き時代でした。)

このようなご縁で始まった「京葉学園」での勤務ですので、入職当初のことは今も忘れることができない思い出となります。

その後「ゆたか福祉苑」「のまる」「のまのまホームズ」とらのこキッズ」と、船橋市内事業所での現場職員、管理職として現在に至っていますが、この間、2代目高橋清一郎先生、3代目の鹿倉操先生、そして入職来より、長きに渡りご迷惑をお掛けしている当時の「京葉学園」園長であった、現在の4代目宮代隆治理事長の下、職務を通してたくさんを経験をさせていただきました。また諸先輩方をはじめ、同僚、後輩、心優しい保育者の先生たちに巡り合えましたことに感謝しております。そして何よりも私自身の人生において、障害をもつ方やお子さん、そしてそのご家族との出会いは大きな意味を持ちます。皆さんとお会いしていなければ、私の人生は全く別な歩みになっていたことでしょう。

昭和から平成、そして令和時代へと時代は流れ、障害者福祉施策は新しい法律が生まれ、関係法令の多くが改正されまし

た。措置制度から利用契約制度へ、保護から意思決定支援、そして施設入所から地域生活支援へと。福祉施設での仕事も障害福祉サービス事業と呼ばれる時代になり、従事する者にとっても「サービス」という言葉に違和感を持つ方も少なくなっているように思います。しかしながら一方で、信じられないような虐待事件や、誰もが生まれ持つ人として尊厳を、根底から否定するような思想が奥深く潜む社会の歪みを感じる中、個人的には未だ「サービス」の持つ意味が、「すとん」と胸に落ちることもなく、耳障りの良い言葉と裏腹に「福祉」が「幸せのお手伝い」から少しずつズレきていないかと不安に駆られることもあります。障害をもつ方の権利を軸に組み立てられた現在の障害福祉施策は、この先どこに向かうのでしょうか。地域の中で分け隔てなく育ち、地域の中で普通に暮らす「ノーマライゼーション」を理念とする社会は実現しているのか？福祉施設で働く者として、確認していかなければと思っています。

これからもさざんか会の一員として、親が安心して地域の中で子どもの育ちに一喜一憂できる地域社会と人のつながりを。その人が持つ個性が光輝くような日中活動や暮らしの場。幼児期に、毎日の楽しい経験をモチーフにしながら、心身の成長の促しを積み重ねられる場の更なる実現に向けて、共に働く人たちと力を合わせたい。それが福祉施設で働く、この法人で働く私の「幸せのお手伝い」なのかもしれません。

「地域の中で育つこと。地域の中で暮らすこと。」これまで法

人事業運営にご参集され、ご尽力された多くの皆様の情熱と想いの積み重ねの50年。大切に、大切にと改めて胸に刻む次第で

「時」

さざんか会 事務長 小山 光世

平成3年8月、開設ひと月後の「ゆたか福祉苑」に伺った時、玄関のガラスのドアを利用者さんがつこりと笑顔で開けてくださいました。今までこのように温かく人に迎えてもらったことがあったのだろうかと感動しました。その後、職員室に通され、自動車会社の社名が付いた青いつなぎを着た方が応接室に座り面接が始まりました。てつきり運転手さんだと思ったその人が今の宮代理事長であり、その後30年も理事長の側で事務の仕事をさせていただくことになるとは思いませんでした。

事業所内の見学をしたとき、利用者さんが一生懸命作業している姿に心を打たれ、心からここで働きたいと思ったのです。しかし、事務の経験はありませんが、福祉の事務の仕事は初めてです。面接の園長先生（今の理事長）に「どのような仕事でしょうか？」とお聞きすると「まあ簡単なことですよ」今もその真意は分かりません…。

す。

「ゆたか福祉苑」での日々は初めてのことばかりでした。右も左もわかりませんでした。利用者さんは笑顔で接してくださいました。毎朝登園すると事務の脇のカウンターの窓からおはようと声をかけてくれる方、外出時に一緒に出掛けたり、昼食の介助の手が足りない時は手伝ったり…。登園・午前活動・昼食・午後活動・降園と1日のスケジュールがありました。その時々利用者さんが事務室を訪問したり、声をかけてくださったたりして時計を見なくても時間が分かるようになりました。事務の仕事としては、当時は措置制度でしたので、月初の在籍名簿を市に送り、月半ばに入金されましたので、予算が計上しやすくなっていました。会計の処理も給与計算も手書きで電卓をたたいていましたので、3枚複写の伝票が1枚でもなくないと探し出すのが大変です。いつしか、利用者さんの訪問時間を考慮して仕事の手順を組むようになっていました。

毎月行われる保護者会や育成会活動等では、保護者の皆様からいろいろお話をお聞きすることがありました。制度が整わず厳しい時代を乗り越えてきた保護者の皆様は、母親業の大先輩です。私は足元にも及ばない…。仕事と育児の両立に悩んだ時もお話を思い出し何とか過ごしてきました。

平成12年「のまる」の開設と共に異動しました。入所施設

は「ゆたか福祉苑」とはまた別の事情がありました。24時間、365日の入所施設。県下でも珍しいユニット型。引越しの荷物をほどこしている間でも、日本全国から見学の方がたくさんお越しになり、お菓子の缶の蓋をひっくり返し、お盆代わりにしてお茶を出したものです。利用者さんの状況も通所とは異なる方もいらつしやり、児童入所施設から来たある男性は、衣装ケースひとつで入所しました。若い彼の荷物がたったひとつ…。無常を感じました。

「のまる」での勤務は1年間で、また「ゆたか福祉苑」に戻りました。

数年前からパソコンが導入されましたが、法律改正により措置から契約に変わり、会計や総務、契約、各種書類等事務の仕事は以前より複雑になってきました。

平成18年自立支援法の下、収入は月の固定金額から日額性となり、利用者さんの障害者区分に応じた利用日数分が、2か月後に入金されることになりました。この2か月分は事業を継続している限り2か月延ばしとなります。職員の勤務日数も変わり、多くの福祉の現場から離れていった人もいたそうです。

会計の制度も大きく変わり、さざんか会のような多岐にわたる事業を行っているところは少なく、どのようにするべきか指導がない中苦慮していました。

平成22年、厚労省から全国20数団体が選出され、会計の基準が変わるための会議が行われました。日本グループホーム学会

副代表の理事長に声がかかり、代理として私が約1年間霞が関に通いました。参加者は有名な方々ばかり…。会計士として本を出している方、全国組織の代表の方…。私は身もすくむ思いで末席に参加させていただきました。

平成23年、船橋法典のカメリアハウスの建物の隣に賃貸物件をお借りし、法人本部を移転することになりました。社会福祉法人の会計が複雑になり、本部機能として独立する必要ができたのです。長い間の懸案事項であった会計処理の指導役会計事務所も見つかり「ゆたか福祉苑」に別れを告げました。

新しい所ですまず驚いたことは、時計が必要なこと。懐かしい利用者さんの声がない…。利用者さんが20年間私の時報を担ってくださっていた…。とても寂しく1日がとても長く感じました。

しかし、現実問題は待たなしの状況でした。平成24年新会計基準が始まり法人の会計が大きく変わりました。霞が関の会議に参加していたため、他法人に先駆けいち早く進めたのですが、会計事務所の方も新しいことばかりでしたので2人3脚で進めました。パソコンソフトの開発も追いつかず、ソフトが対応できない状況に日夜時間ばかりが…。手探りの中、事務職員皆で奮闘しました。

平成27年、さざんかキッズが開所し、本部機能も移転しました。プロポーザル、建物設計、入札、建設とたくさんの方々の力で造り上げたこの大きな児童発達支援センターには、元気な

お子さんと保護者の方がお越しになります。

元気なお子さんの声、泣き声…。「ゆたか福祉苑」の時と同じように時計のいらぬ生活が始まりました。

年少さんから児童発達支援センターに入園するつもりで応募される保護者の方々…。50年前の制度が何もなかった頃とは様変わりしています。育成会の皆様の努力があったればこそ、今の制度があるのではないかと思います。私は第一線で頑張っていた保護者の方に「先輩方の苦労があつて、今の児童のサービスがあるんですね」とお尋ねしたら「そう。当然のようにサービスがある。そのために頑張ってきたのだからうれしい限りです」とおっしゃっていました。

今の児童の福祉サービスも、皆様が満足する状況ではないと思います。今は今で難しい状況もたくさんあるのではないのでしょうか。昔より情報はありますが、社会福祉法人以外、NPOや株式会社もサービスを提供しています。その中でお子さんの支

援が整う方法は…。

社会福祉法人に求められる内容が益々増え、会計・総務・契約・情報公開等…。事務の仕事も多岐にわたります。しかし、国の配置基準に事務は入っていません。制度は複雑になり求められることは増えていく中、国は事務の仕事は必要ないと言うのでしょうか…。いつも考えさせられます。

親の会が作った当法人で、利用者さんの支援をするための活動や職員の縁の下を支えるのが事務の仕事だと思います。奉職…：今はこの言葉を耳にすることは少なくなりましたが、50年の法人の歴史には、まず育成会があり、利用者さんの生活がある。このことは忘れないでいたいと思います。

30年前ガラスのドアを開けてくださった利用者さんの笑顔、元気な利用者さんの声。この月日を共に歩むことができたことがとても幸せでした。これからも法人の継続のために、縁の下を全事務職員で支えていきたいと思っています。

『28年間を振り返って』

けいよう 施設長 古川 世志恵

私が、さぞんか会にお世話になったのは、平成6年の3月で

した。現在の「けいよう」が「京葉学園」という名称で、京成西船駅近くの宝成寺さんの境内をお借りしていました。当時私は、産休代替職員として約1年間勤務させていただいていました。毎日がとても楽しく、契約期間が終わった後も、もつとここでお世話になりたいと思っていた時に、当時の施設長さんから常勤で働かないかとお声を掛けていただきました。「ぜひお願いします!!」と即答し、それから約28年が過ぎてしまいました

た。京葉学園を始め、その後、平成12年に「のまる」に異動、平成25年には法人で初めて相談支援事業を高根台にアパートの1室を借りて立ち上げそこに異動しましたが、その後2年程で単体での事業として立ち行かなくなり、平成27年にけいようの空いていた部屋に移り、それと同時に、「けいよう」の管理者として現在も勤務させていただいています。

「さざんか会にお世話になる前は、他市の別の法人で数年間働いていました。しかし、そこは1つの事業所しかなかったので、さざんか会に入職していくつも事業所があることに驚き、その中でいろいろな事業をされていて、職員数も多く何もかもが新鮮でした。また、前の職場は当時でいう児童の入所施設で、親御さんとの関わりもほぼ無い状態でした。しかし、「京葉学園」では、毎日送迎で親御さんと顔を合わせることができ、連絡帳でも日々のやり取りができ、コミュニケーションが取れやすい、しかしその反面、言葉一つで親御さんの表情や気持ちが変わることを知り、対利用者さんだけではなく、親御さんに対してもきちんと向き合いつつかり仕事をしないといけないということを感じました。

さざんか会は、母体が親の会（現：船橋市手をつなぐ育成会）ということと、親の会のニーズをさざんか会が具体的な事業として展開するという図式になっていて、親の会とさざんか会は車の両輪のようにお互い協調して歩を進めてきたと、理事長から度々話をお聴きしてきました。実際に私がお世話に

なつてから約28年間で、グループホーム10数件（名称が替わったり、合併したりしていますので正確の数をお伝えできず申し訳ありません）、障害者支援施設、多機能型事業所、児童発達支援センター、地域生活支援センター、相談支援事業所を開設してきました。改めて並べてみるとすごい数に驚きます。一つの事業を始めるのには、金銭的な面もそうですが、職員の力も必要不可欠です。親御さんたちの声に耳を傾けながら、利用者の方に自分らしく、前よりも幸せに過ごしていただきたい、そういう強い気持ちがあれば進められません。「のまる」を開設する時に、準備等で私も少し携わらせていただき、入所するにあたって入所を希望される方と面接をしました。親御さんのお話から、「のまる」を必要としていることがひしひしと伝わってきました。この地域に、この方に「のまる」が必要なのだ、「のまる」はこれだけの方達に必要とされている、この方達のために良い施設を作らなければいけないのだと思い知り、この思いを胸に仕事を続けることができました。

これからも、さざんか会は今までもそうであったように育成会の方々と両輪になり、必要とされる事業を展開していかねばいけないと思っています。そのためにはどのくらいさざんか会が魅力ある法人なのか、必要とされている法人なのか職員にも見せていくことも必要だと思っています。さざんか会が利用者の方にとっても、ご家族にとっても職員にとっても更に魅力あるものになるように自分自身でもできることをして、また管理

者間でも協力し合い一歩一歩進めていければと思います。

『さざんか会』

創立50周年に寄せて』

DDホームズ 管理者 渡邊 隆 宣

当法人の各種サービス利用者の方々、並びにご家族の皆様、そして各関係機関や地域の方々、ご支援いただいた全ての皆様等、たくさんの方々に支えられて法人設立50周年を迎えることができ、心より感謝いたします。

私自身もさざんか会に入職して25年以上が経ちました。これまで前を向いて歩くことができたのは、利用者の皆様とのふれあいや、そのご家族からの励まし、そして、時に叱咤激励をしてくださった諸先輩方や同じ想いを抱く仲間が存在が大きかったと思います。

さて、現在私が携わっているグループホームのこれまでの歩みと、法人のホームの取り組みについて触れておきたいと思えます。

1989年にグループホームの制度ができました。その8年ほど前、私は山手線田町駅近くの東京都障害者福祉会館で学生

ボランティアをしていました。玄関前には「完全参加と平等を」と書かれた横断幕が掲げられていたのを今も鮮明に覚えています。「ノーマライゼーション」の横文字も並んでいて、急にこのフレーズが世に出てきたのもこの頃でした。それと同時に、障害者の差別をなくし、社会参加を促す取り組みが社会全体に広がりました。これがその後の制度誕生の流れになったとされます。

その頃、別の法人に在籍していた私が、さざんか会の取り組みとして印象に残っているのは、早くから「ナイトケア」と称して通所施設であっても泊まり業務を行っていたことです。研修等でその話題になると、当時は賛否両論で否定的な意見が多かったことを覚えています。それでもそこにニーズがあるからと、制度ができる前から先駆的な取り組みをされていたことに共感しました。このことが、さざんか会にお世話になるきっかけの一つでした。その後「地域」や「地域福祉」の文字が関係冊子や書物、新聞等にも並ぶことが多くなり、「地域移行」が唱えられるようになりました。

今から約25年前、このような社会背景の中、当法人はグループホームの前身として、北習志野駅近くの一軒家を借りてお泊まりハウス「ほっと」を立ち上げました。平日の日中活動を終了してから、お泊まり体験を順番に行っていました。まずは

実績を積むことで自信を深めてもらう狙いもあつたのです。最初は、「うちの子は障害が重いからグループホームは無理」というお声もありましたが、体験を繰り返すことによってご本人とご家族に前向きな変化が現れ、このことをきっかけに、順次グループホームへの移行が実現の運びとなり、今の8か所のホームが形成されました。

あれから月日が流れ、入居者の方々の平均年齢も40代後半になりました。当然ながら、ご家族の方も同じく歳を重ねています。加齢に伴う身体的機能の低下により、自ずと支援も限られ、生活や暮らしに変化が生じます。「親亡き後」の4文字がのしかかってくるのも、この頃ではないでしょうか。その点では、今こそ我々が地域生活の担い手としての役割を果たす時だと思っています。

では、どのようにサポートするのでしょうか。それは私たちさざんか会の職員集団の一人ひとりの「福祉スピリット」にかかっています。この言葉は、飽きられた私のお決まりのセリフです。幸い、この「福祉スピリット」を持った、気持ちのある職員が当法人にはたくさんいます。それぞれの職責と専門性を発揮し、できることから、その日その時の最良の選択をして必要な支援を実践することが大切だと考えています。

日々の生活支援は待たなしで、24時間365日を想定しています。ニーズがあればサービスを展開し、必要な場面において、臨機応変に対応することが目標です。

ご家族が主となる支援から転換し、地域で多職種の支援チームが連携することで、ご本人を知る人々の輪を作ることが大切です。そのためには、より安定した生活が維持されるように、日頃から関係機関との連携と関係性の構築をすることが有効だと考えます。また私たちがこのような取り組みを継続することによって、ご家族の方は「ちゃんと見てもらっている」という安心感を得ることができると思います。

私は「福祉スピリット」を胸に、老体に鞭打ちながら、これらの実現に向けて、あともう少し頑張ります。これからも末永くご支援、ご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。



『育みの歴史の中で』

ゆたか福祉苑 施設長 尾村 勉

私はこの法人で働かせてもらっていることに、誇りを感じています。

50周年記念誌に寄せてのおべんちゃらや忖度ではなく、心からそう思っております。

とは言え、平成9年の入職時から同じように思っていたかといえ、そうではありません。不真面目な学生生活を送っていた私は、卒業間際まで就職先が決まらず、見かねた友人の誘いで、千葉県福祉人材センターにて、『ゆたか福祉苑』という通所施設で『産休代替職員』を募集している由の求人票を見つけてその場で電話し、卒業式翌日に、当時の宮代苑長に面接をさせていただきました。福祉系とは名ばかりの、にわか専門学校のみゆるま湯に甘え、何の資格も、大した知識も得ることなく卒業した私を、さざんか会が拾ってくれました。日給6000円のパート契約でしたが、こんな自分が学生から社会人へステップアップできる足掛かりを得られたことに希望が持てましたし、何より両親の安堵した表情を思い出します。

さざんか会の歴史や理念を知らずに雇っていただきましたが、

入職してもなお、なかなかその尊さに気付くことができずいました。もちろん、法人の源流は、船橋市手をつなぐ育成会の誕生まで遡り、先人達が連綿と、そして発展的に紡がれてきたことについて、機会があるごとに耳にはしていましたが、まさか自分がその歴史の延長線上に触れてしまっている意識などなく、どこことなく自分とは別な世界の物語を聞いて、畏怖のようなものを感じているだけでした。でも不思議と、ここで働いている自分は、何かに護られているような説明のつかない安心感がありました。

その頃の私は、目の前のご利用者様と、明るくアクティブな関わりをすることに夢中で、それだけで「楽しかった」。逆にあまり思い返したくはないのですが、自分が楽しむことばかりか、支援の意味をはき違えて、ご利用者様に対して偉ぶったり、高慢な姿勢で接したりと、失礼・無礼な言動や振る舞いが多くあったかと思えます。そんな頼りなく危なっかしい私を、ご利用者様ご家族はずっと優しく見守ってくれていること、「あれ?」「もしかして?」と少しずつ感じ取れるようになり、そのような事象に思い当たる度に、慙愧に堪えないむずがゆさと、ご家族の懐の深さへの畏敬の念を抱きつつ、ある時「はっ」と気が付きました。

「育まれてる…」と。

支援者として雇ってもらったことに天狗になり、ご利用者様に対してどこか上から目線で支援する私を、ご家族は我が子も

ろとも更なる大きな器で包み込み、育んでくださっていたのです。それは、「障害がある我が子のために」と手を取り合い、京葉学園を生み育んだ歴史、さざんか会を生み育んだ歴史、さざんか会がさまざまな事業を生み育んでいる歴史、その縮図の中で育まれている自分もいることに、ようやく気付きました。そして同時に、この法人で働かせていただいていることに改めて感謝の気持ちが湧き、誇りを感じました。

どの施設であろうと、たくさんの方々の想いと努力が結集して生まれるものと理解していますが、とりわけ『ゆたか福祉苑』は、誕生してなお資金繰りが厳しく、ご家族からの直接の

『1111にいる理由』

カメラアハウス 施設長 藤 藪 正 英

社会福祉法人さざんか会創立50周年おめでとうございます。僕がお世話になっていつのまにやら20年、さすがにあつという間ではありませんでしたがもうそんなにと驚いております。

「どうしてこの仕事を始めたんですか？」と聞かれたことがある職員はたくさんいるのではないですかね？ 保護者の方からはもちろん、他業種の方から聞かれることもありまし

「ご融資をもって立ち上がり歩み始めた経緯も重なり、ご家族が「ゆたか丸」と我が子」のように見守ってくださる風土があります。育んでもらっていることに気付いた以上、甘えてばかりはいられません。育みの歴史の中に自身の身を置きつつ、真にご利用者様に寄り添った支援とご家族支援に励んで参りたいと思っております。

私がさざんか会に拾ってもらって両親が安堵の表情を浮かべたように、ご利用者様とご家族様の安堵の表情を増やせるよう、恩返しに努めます。

こちらからしたら「あなたこそなんで保険屋やってんの？」と思いますが、この職業は特殊に見えるんでしょうね。たいていそうだった際には感動の混じった答えを求めている感が見え隠れしています。でも僕にそういった明確なものはなく「導かれたんでしょうねえ」と答えると期待はずれな表情をもらいます。本気で言ってるのに…。

お世話になって20年、3事業所を渡りいろいろな経験をしてきました。それぞれの事業所に思い出があります。その中で一番印象深いことはゆたか福祉苑でのTさんとの日々でした。お話は得意ではなかった方でしたが、時折見せるエビスさんのような笑顔に惹かれていました。体が大きなTさんは本意に近くにいる人の衣服などを掴んでしまうので、グループ部屋の1

画に柵とテーブルで個人スペースを作られそこで過ごされてお
り、日がなゴロゴロとされていました。僕もTシャツを引つ張
られたり髪の毛を掴まれたりしましたが、ときおり自スペース
から出てくると中に戻される「なんか違うでしょ」と。異動し
てきたばかりの藤敷は妙な義務感を持ち他の活動の合間を見て
一緒に外に出たりして親交を持っていき、そのうちに食事会で
お寿司を食べに行ったり、公園でマクドナルドのハンバーガー
と一緒に食べたりしました。そんな穏やかな日々が届いたのが
母の急死の知らせ、弟さんがいたものの同居は難しく一時的に
ゆたか福祉苑での緊急ショートステイ対応となりました。この
件、理事長が以前に広報誌に寄稿していましたが、ここからは
現場職員の思いとして記します。もちろん現実を理解できない
Tさんは初めのうちは何となく過ごしていましたが、普段の暮
らしと違うことに徐々に気が付いたのか、夜中に施設内を叫び
声をあげながら走り回っていました。当然ですよ、大好きな
母に会えずずっと同じ場所で毎日を送っている、その異常な状
況に耐えられるはずはなかったでしょう。当然動かすにはいら
れず理事長に何とかしてほしいと直訴状のようなものを書き
ました。当時はキーボード入力が苦手だったので手書きで、熱
量5倍増しですね。そこからの動きがとても速く、たまたま他
の利用者さんも保護者が亡くなり自宅をグループホームとして
提供してくださるという話が挙がっていたのであれよあれよと
言い出しつぺなのでそのグループホームには週2くらいで宿直

に入っており、彼の表情が戻っていくのを目の当たりにするこ
とができました。ある夜彼が部屋で独り笑い声をあげていたの
で見に行くとあのエビス笑顔をしていました。僕は泣きながら
「その笑顔に会いたかったんだ」と彼を抱きしめました。彼は
何のことかわからない顔で。そりゃ迷惑でしたな……。

僕がカメラアハウスに異動になって彼とは距離が空きました
が、ゆたか福祉苑に寄った際には顔を見に行きましたが彼は素
知らぬ顔、らしくていいねと。いち支援員の思いを拾い上げて
くださり動いてくれたこと、僕にとつてのさざんか会の意味合
いを決定づけた事柄であり、管理者となった今では現場から上
がってきた声は無下にすることなく、実現できない際には納得
してもらえるように理由を伝えるという指針を持つようになり
ました。

もちろんカメラアハウスでも忘れられない出来事はたくさん
あって、学生時代周囲から理解されず攻撃することでしか思い
を表現できなかった方と涙を流しながら向き合った結果、心が



● カメラアハウスは昨年、
建て替えられました。

通じたのか今は
毎日穏やかに過
ごされているこ
と、マリンマラ
ソンに参加して
ハンディなしで
周りを追い抜い

ていく2人を見ながら涙を堪えきれず走っていたこと、一般企業の研修会に招待されて自分たちの作った商品を大声で売る姿に感動して登壇した際に100人以上の方々の前で涙してしまつたこと、連ねるとただの涙もろいおっさんですね。

冒頭の仕事に就いた問いに対して今後「導かれて」と答え

『笑顔のために』

さざんかキッズ 施設長 奥山 裕美

朝10時、バスの到着とともに子ども達の元気いっぱいの笑顔にさざんかキッズは包まれて一日が始まります。

この子達の笑顔を守ること、保護者の皆さまが安心して預けられる施設であること、それを使命と思って、さざんかキッズの職員と一緒に毎日を過ごしています。

私自身のことですが、短大を卒業して、成田の知的障害児入所施設で4年、江戸川区にある保育園で5年勤務。その後専業主婦を7年。復職して習志野市の知的障害児通園施設で8年、縁あってさざんか会に入職し、とらのこキッズ、さざんかキッズで16年の日々を過ごして参りました。 歳がばれる〜(笑)

思い起こせば私が短大生だったころ、「でっばる」という集

ると思いますが、この仕事を続けていく理由はたくさんもらいました。それに関して伝えたいことはたくさんあります。

この先さざんか会を引っ張っていく自信なんて全くありません。でも培ってきたイズムを伝えていく義務と自信は持っています。こんな奴ですがこれからもどうぞよろしくお願いします。

まりがあり、現評議員の荒木先生、亡くなられた篠先生をはじめとする諸先生方が千葉の、日本の福祉について昼間から、夜通し熱く語り合う一泊の合宿がありました。何もわからないまま私も深夜、眠たい目をこすりながら参加させてもらっていました。その中に、まだまだ黒いロン毛がふさふさしていた宮代理事長も参加されていて、何を語っておられたかは忘れませんが、酔って歌って余興をされていた姿ははつきり覚えています。

習志野で勤務していたころ、転職の相談を篠先生にしたところ、「宮代さんの所にお世話になりなさいよ」と勧められ、でっばるの合宿がご縁だなあと思いながら、できたばかりのとらのこキッズを見学させていただき、平成19年4月さざんか会に入職しました。

とらのこキッズは木造のこぢんまりした温かみのある建物で、30名定員の就学前の知的に障害のあるお子さん達の通う施設で、平成18年9月に開園しました。その半年後に私が入職したのですが、まだまだ整っていないことが多く、お子さんの能力に合わせて遊ぶこと、それぞれに適切な支援をすることよ



● 「とらのこキッズ」 職員パワー全開！

りも、その日その日にお子さん達をけが無く無事に帰すこと、帰りのバスに時間通りに乗せることで精いっぱい毎日でした。その中で、働く先生方は、とにかく元気で前向きで、よく笑いやよく泣いていました。子ども達がうまく動いてくれないのは、自分たちの誘導が子ども達に伝わっていないから…と毎日反省しきりの先生方でした。

そんな中、その先生方より少し年上な私は、「とにかく子ども達を褒めましょう。褒めるポイントを探しましょう」と伝えていきました。子どものできない所を見つけたら、それを指

摘するのは簡単です。でもそれより、ちよつと楽しそうな姿を見つけて一緒に遊ぶこと、いっぱい介助をしても最後の所で、自分でできたという達成感を味わってもらえるよう褒めること、自分を認めてもらうことで大きく成長するのがこの時期の子どもです。

それを本当にいていねいに一生懸命に褒めることを実践してくれたのが、とらのこキッズの先生方でした。

そして私は、とらのこ

キッズで、齊藤幸子園長と出会いました。140センチそこそこの小さな体に、たくさんのパワーを持った素晴らしい方でした。とにかくいていねいで細やかな方で、保護者への言葉かけや気遣いには学ぶことができました。齊藤園長扮するとらのこキッズの「とらりん」は、子ども達はもちろん保護者の方々にも大人気のアイドルでした。齊藤園長の優しさといねいさが当時の職員にも浸透し、穏やかで伸びやかなとらのこキッズの基盤となっていました。

そしてここで一つ、ある日当時主任であった私は、自分の不注意から、事故を起こしました。事故報告書を理事長に提出し、「指導的立場にありながら、このような事故を起こしたことを反省します」と記載しました。すると理事長より私個人宛のいていねいなお手紙をいただきました。そこには、「全能な人間などありえず、失敗を繰り返しながら学んでいく」「指導的立場に立つということは自身の未熟さ、至らなさ、弱さの自覚から始まるのではないか」と書かれていました。ハッとしました。優しい言葉と方向性を示してくれる温かい言葉。今も私の根源となっています。お手紙は今でも大切に毎日持ち歩いています。

そして平成26年、突然、第2とらのこキッズを建設する話が出てきました。公立の「さざんか学園」の閉園に伴い、定員80名の児童発達支援センターを建設するという話でした。まずはどんな施設を作るのか？ どんな子ども達を呼ぶのか？ たくさんの「はてな」と闘いながら、設計や建設会議にも参加さ



● 『さざんかキッズ』の子どもたちの力作。

せていただき、多くの新しい発見や学びがありました。たくさん
の紆余曲折がありました。平成27年7月1日、さざんか
キッズが開園しました。フクラス70人の知的障害児と一クラ
ス10名定員の肢体不自由児。そしてたくさん保育士、児童指
導員。新しく一緒にすることになった専門職。本当にバタバタ
の中、7月1日初日に園児に給食が提供されたのが夢のよう
でした。それから、8年。これまでに230名の卒園児を送り

出しました。

この仕事に携わってから、たくさん
さんの障害のあるお子さんとその
保護者とお話しさせていただいて
きました。

どうしてわが子が障害児なのか
と涙した日も「いつこの子と…」
と思った日もあったかと思えます。
それでもおなかをすかせた子にご
飯を作らないわけにもいかず、涙
を拭いてフライパンを握るしかな
い日もある保護者の方が、朝のバ
ス停で「今日もお願いします」と
笑顔でお子さんを送り出してけれ
ることが、奇跡だと思っています。
そうやって頑張っている保護者の

皆さんに、ほんのちよつと寄り添わせていただいて、少しだけ
でも「またちよつとこの子をギューしたいなあ♡」と思つてく
ればと願いながら毎日仕事をしています。

20歳の頃、成田の入所施設で初めてであった当時5歳の美佐
子さんは、現在北総育成園でシクラメンを育てています。30有
余年ぶりの再会に私は感動していましたが、美佐子さんは黙々
と鉢を運んでいました。

習志野の知的障害児通園施設で担任をした年少児だったとお
るさんは、昨年6月からゆたか福祉苑をご利用しているとお聞
きしています。

そして、どらこのキッズの初代卒園児は、この3月高校
を卒業し、それぞれの道に進んでいくのでしょうか。

そしてこれから成長し大人になっていく園児の皆さんが、い
ろんな人と出会い、安心できる場所を見つけ、それを自由に選
択ができる社会になっていくことが、保護者の皆さんにとって
の安心になっていくと思います。

「そこにさざんか会が…」といつも理事長がおっしゃって
います。

さざんかキッズは、まだまだ十分な療育ができていないとは
思っています。でも、さざんかキッズには、不器用でも、ど
んなことも諦めない一生懸命な先生達があります。だからこれか
ら子ども達と一緒に成長していけると信じています。

笑顔で登園してきてくれる子ども達とその子達を送り出して

くれる保護者の方々への感謝の気持ちを忘れず、今日も笑顔でお迎えしたいと思う毎日です。

『のまる』とは

のまる 管理者 岩佐 龍哉

令和3年度より、のまる管理者としてご利用者様と1年過ごさせていただきました。ユニットの利用者様と身近で過ごし支援させていただいた頃とは違う環境で、全ユニットの利用者様の様子や変化を感じる場面やユニットごとの特色、職員の個性や関わり方など新たな発見の毎日です。何をどう伝えれば良い支援に繋がるのかなど、試行錯誤する毎日でしたが、のまる全体に視点を向けることでのまるの強みを発見することができました。

《ユニット体制を活かす》のまるは、4ユニットの支援体制を整えております。利用者様は、20代の方から60代の方まで幅広い年齢の方がご利用されています。こだわりの変化や身体能力の変化など年齢を重ねるに伴い、同じような場面に気が付くことがあります。ユニットごとに年齢層が分かれている支援体制で、所属ユニット勤務では、気付けなかった新たな発見が

ありました。精神面や身体面の変化や予兆を職員に伝えることで、本人の不安や起こりうる可能性があるけがや病気の予防を図れます。

《職員を活かす》毎朝各ユニットへ、ご利用者様・職員に会いに行きます。シフト勤務の職員は日々変化しますが、利用者様は変化しません。毎日、職員の関わり方や利用者様の表情を見ると違いを感じます。利用者様にも職員の好みがあり、たまに他のユニットの職員が応援勤務に入ると見たこともないような笑顔がありました。職員も楽しそうに支援をしています。長期間、一緒に過ごすことでの信頼関係・マンネリ化・依存に繋がる関係などさまざまな変化があります。支援に関わる職員を一部変化させることで、利用者様やユニットの雰囲気が大きく変化します。また、さまざまな利用者様の支援を経験することで職員のスキル向上にも繋がります。利用者様から求められることで、職員のモチベーション向上にも繋がります。柔軟な視点で支援体制を整えていきます。

複合施設とは、入所支援・生活介護・短期入所・日中一時支援・相談支援と、のまるはさまざまなサービスを提供できる事業所となります。船橋市特別支援学校の実習生を受け入れる際の保護者面談にて、柔軟なサービス提供を必要とするご家庭が

多数あることに気が付きました。必要とするサービスの利用時間・曜日・宿泊・相談など一定ではなく常に変化します。のま
るは365日24時間サービス提供が可能で、いつでも相談が
できて対応が可能です。生活リズムが乱れたり、環境の変化で
混乱したり、成長過程での変化など、常に支援が必要とされる
時に寄り添い対応できる事業形態の事業所となります。これか
らも総合力を活かしてさまざまなケースに対応していきます。

感染症対策の不備、令和4年2月25日に職員のコロナウイル
ス陽性反応が確認され以降、利用者様への感染にも繋がりました。
多数の利用者様に発熱症状や咳など辛い思いをさせてしま
い、ご家族・関係者の皆様には大変なご心配とご迷惑をおかけ
してしまいました。発熱症状を伴わない陽性反応と、日々変化
する感染株への理解が不十分で感染拡大を起こしてしまいま
した。船橋市保健所・県の感染症対策対応の看護師より、的確な
アドバイスをいただきこのまの感染症対策を見直しました。今
回の集団感染を大きな教訓として、再発防止に努めてまいりま
す。

今後、起こりうるのまの課題として、利用者様の加齢に伴
う支援や医療サポートが課題となります。支援に関しては十分
な対応を工夫することで提供できますが、医療行為は支援職で
はできない領域があります。嘱託医の先生・協力病院・地域の
医療機関と連携し、少しでも長く利用者様と一緒に過ごしたい
と考えています。今後の法律改正や医療の情報など、利用者様

に関わる情報を集めて何ができるのかを模索していきます。

1年間では、まだまだのまの良さやご利用者様を守る対策
が不十分な状況です。これからも時代の変化に合わせて安心し
て過ごせるのまを実現させていきます。



『さざんか会の50年
～力を合わせて～』

発行日 2022年9月11日

発行者 宮代隆治

発行所 社会福祉法人 さざんか会

〒273-0044

千葉県船橋市行田2丁目8番1号
047(404)1135

社会福祉法人 さざんか会